

松 山 大 学 論 集
第 23 卷 第 2 号 抜 刷
2 0 1 1 年 6 月 発 行

ウッドローンとウッドローン・オーガニゼーション
—— 都市再開発をめぐる黒人と白人 ——

内 藤 辰 美

ウッドローンとウッドローン・オーガニゼーション

—— 都市再開発をめぐる黒人と白人 ——

内 藤 辰 美

問題の所在

ウッドローンとウッドローン・オーガニゼーション

1949年の住宅法とアメリカ

(1) 1949年の住宅法と成長連合

(2) 都市と郊外—社会的空間の総体的再生産—

都市問題と都市政策—公共的市民文化形成の可能性—

(1) アリンスキー戦略の意義と限界

(2) 公共的市民文化の可能性

結語に代えて—合衆国・市民文化の再建とアリンスキー—

問題の所在

周知のように、都市問題と都市政策は、社会体制と都市の歴史を、そして国家のあり方を反映する。都市問題と都市政策に対する理解は、都市を包む社会体制に対する、そして、都市と社会体制のあり方に深く関わる国家に対する認識を要請する。もとより社会体制も国家も都市も、それぞれが歴史的な存在であり、かつ、それぞれが、歴史の段階によって特有の様相を示すから、都市問題と都市政策の理解に当たっては、都市の〈歴史と歴史的段階〉に対し、特別の留意がなければならない。

都市問題は社会問題のひとつである。都市問題は、下位体系としての都市と都市を包む上位の社会体制が抱える矛盾を、直接・間接の原因として生起するところの社会問題である。ウッドローンにおいて生起した社会問題、シカゴと

いう都市に生じた〈都市問題〉とは何か。端的に言えば、それは、アメリカの歴史に根ざした人種・民族問題であり、アメリカ社会、アメリカ資本主義の発展に付随した、貧困問題・階層問題、あるいは住宅問題・スラム・クリアランスの問題であった。別の言葉で言えば、都市シカゴのウッドローン地区に集中的表現を見たところの、アメリカ問題であった。それは、シカゴ市とウッドローンに限られた問題でなく、アメリカの多くの都市で生起している問題である。ウッドローン地区が特別の関心を集めたのはなぜか。ウッドローンには、そこに、人びとの関心を惹きつける、もうひとつの動きがあった。それは、都市政策、住宅政策、コミュニティ政策をめぐる権力と反権力、政策主体と対抗勢力——連邦・シカゴ市当局・シカゴ大学とウッドローン・オーガニゼーション——の間に社会闘争が展開され、それが、ウッドローンとシカゴ市を超えて、〈アメリカ〉の問題と認識されたことである。都市問題とそれに対峙する都市政策が、政策をリードする政策主体と対抗勢力の対立という構図を生みだした。そうした構図のなかで対抗勢力を組織化するために登場したのがソール・アリンスキー (S. Alinsky) である。ウッドローンはソール・アリンスキーの登場によって、アメリカの都市問題、アメリカの社会問題という様相を帯びることになった。アリンスキーの登場を契機にウッドローンは〈アメリカ問題〉の展開舞台となったのである¹⁾。

ウッドローンとウッドローン・オーガニゼーション

ウッドローンはシカゴ市の南部、シカゴ大学に隣接する位置にある。ウッドローンは、20世紀も近づいた時期、ロックフェラーの支援によってシカゴ大学がこの地に建設され、シカゴ市が発展するとともに、市域に組み入れられてきた。1920年には黒人人口を見なかったウッドローンであるが、第2次世界大戦後、とりわけ1950年代以降、黒人の流入が顕著となり、1960年にはほぼ黒人居住者で占められるようになった。「1950年代のウッドローンは古い白人の居住地域が拡大する黒人ゲットーにとりこまれてきた荒廃地域であった。…

ウッドローンは黒人の国内移住者でいっぱいになった。63 ストリートの鉄道駅は南部からひっきりなしにやってくる流入者が便利に使ったウッドローンへの入り口であった。加えて、ウッドローンには北側の地域から、スラム・クリアランス事業によって追い出された数千の黒人家族がやってきた。1950年と1960年の間にウッドローンは白人が86パーセントの地域から黒人が86パーセントの地域に変化した (Fish, J. H, 1973) (表-1)。ウッドローンは、「南部からの莫大な移民に用立てるために、古い中産階級の家を区分して使い、結局はシカゴを黒人の多い街にしていった地区の一つであった」 (Rose, S. P., 1964=1975, 田村明訳: 181-186)。スラムの家主たちはまちがいなくその恩恵

表-1 L. Wirth and E. H. Bernert, (ed). *Local Community Fact Book of Chicago, The Univ. of Chicago Press, 1949*

DATA FOR CHICAGO COMMUNITIES

TABLE A	AGE, NATIVITY, MARITAL STATUS, CITIZENSHIP, AND EDUCATION BY SEX, 1930 AND 1940											
	1940						1930					
	TOTAL		MALE		FEMALE		TOTAL		MALE		FEMALE	
	NO.	%	NO.	%	NO.	%	NO.	%	NO.	%	NO.	%
POPULATION	71,686	100.0	34,385	47.9	37,300	52.1	65,052	100.0	32,580	49.3	32,472	50.7
AGE												
UNDER 5 YRS	3,705	5.2	1,866	2.6	1,839	2.6	3,134	4.8	1,975	3.0	1,159	2.4
5-9 YRS	3,457	4.8	1,750	2.5	1,697	2.4	3,053	4.7	1,937	3.0	1,116	2.4
10-14 YRS	3,925	5.5	1,988	2.8	2,014	2.7	3,490	5.3	1,658	2.5	1,832	2.8
15-19 YRS	4,405	6.2	2,121	3.0	2,241	3.1	4,296	6.5	1,988	3.0	2,310	3.5
20-24 YRS	6,054	8.4	3,079	4.3	3,285	4.4	5,114	7.8	2,403	3.7	2,711	4.1
25-29 YRS	6,944	9.7	3,225	4.5	3,449	5.1	7,477	11.4	3,276	5.0	4,201	6.3
30-34 YRS	6,810	9.4	3,058	4.4	3,972	5.0	6,718	10.0	3,454	5.3	3,254	4.9
35-44 YRS	12,126	16.9	5,477	7.0	6,631	9.2	12,008	18.2	6,086	9.2	5,928	9.0
45-54 YRS	10,749	15.0	4,407	6.0	5,828	7.4	9,918	15.2	4,752	7.2	5,163	7.7
55-64 YRS	6,949	9.7	3,205	4.5	3,644	5.1	5,844	8.6	2,630	4.0	3,214	4.8
65-74 YRS	4,019	5.6	1,819	2.5	2,200	3.0	2,837	4.3	1,347	2.0	1,490	2.2
75 YRS AND OVER	1,250	1.7	610	0.9	950	1.3	921	1.3	341	0.5	580	0.8
18 YRS. AND OVER	58,122	81.1	27,974	38.6	30,448	41.8	53,261	81.6	26,607	40.3	26,654	41.4
21 YRS. AND OVER	55,207	77.0	24,341	33.7	26,866	36.3	51,720	78.0	25,193	38.1	26,526	40.7
MEDIAN AGE	35.4		35.0		35.3		33.1		32.9		33.3	
RACE AND NATIVITY												
OF NAT. WH. PAS.	50,716	70.7	23,965	33.4	26,753	37.3	47,336	71.7	22,950	34.8	24,386	36.8
OF FORN. BORN. OR MIXED												
PARENTAGE												
FOREIGN BORN WHITE	8,728	12.2	4,036	5.5	4,698	6.7	9,846	15.1	5,179	8.0	4,667	6.9
NEGRO	12,107	16.9	5,684	7.9	6,423	9.0	6,978	10.7	4,156	6.2	2,822	4.2
OTHER RACES	140	0.2	102	0.2	38	0.1	292	0.4	80	0.1	90	0.1
SEX RATIO												
15 YRS. AND OVER	91								97			
25-44 YRS	91								101			
TOTAL	92								100			
MARITAL STATUS												
POPULATION 15 YRS. AND OVER	40,433	100.0	20,891	87.7	31,742	100.0	56,187	100.0	27,651	49.2	28,476	50.7
SINGLE	18,397	45.5	9,590	36.1	8,797	24.4	19,894	35.4	11,059	19.6	8,835	15.6
MARRIED	33,476	82.7	16,904	64.8	16,972	49.9	29,081	51.7	14,668	26.1	14,413	25.6
SPOUSE PRESENT	3,066	7.6	1,659	6.2	1,727	4.8						
SPOUSE ABSENT	3,206	8.0	1,659	6.2	1,727	4.8						
WIDOWED	6,148	15.2	1,455	5.4	4,713	12.8	5,604	9.9	2,813	4.9	2,843	4.9
DIVORCED	2,414	6.0	862	3.1	1,280	3.6	1,448	2.6	713	1.2	923	1.7
LEADING NATIONALITIES												
OF FOREIGN-BORN WHITE												
1 Irish Free State	1,177	13.5	538	6.1	645	7.4	1,467	14.9	692	6.8	765	8.1
2 Germany	1,099	12.5	492	5.7	597	6.5	1,194	12.1	592	5.6	602	6.1
3 Russia	768	8.8	397	4.6	372	4.2	645	6.6	348	3.2	297	2.9
4 Canada (Other)	917	10.5	318	3.6	408	4.6	1,066	10.5	497	4.5	569	5.6
5 Greece	708	8.1	351	6.1	179	2.0	535	5.4	459	4.5	96	1.0
CITIZENSHIP FOREIGN BORN WHITE 21 YRS. AND OVER	8,479	100.0	4,510	83.2	3,989	85.6	9,405	100.0	5,092	54.0	4,331	46.1
NATURALIZED	6,405	75.5	3,255	61.9	3,245	80.6	6,649	70.7	3,593	38.0	3,056	32.7
FIRST PAPERS ALIEN	481	5.7	498	9.5	333	8.0	1,066	11.3	760	8.3	306	3.2
NO PAPERS ALIEN	1,585	18.5	366	6.3	699	17.3	1,370	14.6	574	6.1	796	8.5
UNKNOWN	116	1.4	14	0.3	92	2.3	131	1.4	118	1.2	113	1.2
SCHOOL YEAR COMPLETED												
POPULATION 25 YRS. AND OVER	50,137	100.0	24,061	100.0	26,076	100.0						
TOTAL	467	1.0	229	1.0	238	1.0						
NO SCHOOL	1,456	3.0	780	3.3	796	3.3						
GRADE 1-4	19,928	39.7	9,712	40.0	10,210	39.2						
GRADE 5-8	9,676	19.3	4,228	17.5	5,254	19.4						
HIGH SCHOOL 1-3	11,076	22.1	4,723	19.6	6,295	23.4						
HIGH SCHOOL 4	7,610	15.2	3,389	14.0	3,481	13.0						
COLLEGE	116	0.2	64	0.3	92	0.3						
NOT REPORTED	10.0											
MEDIAN SCHOOL YEAR												

WOODLAWN 42

POPULATION 1920 66,028
1940 71,686

PER CENT INCREASE 8.6

AREA IN SQUARE MILES 1.4024

DENSITY PER SQ. MILE 51,118

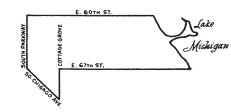


TABLE B

TYPE OF DWELLING STRUCTURE 1940

TYPE OF DWELLING	NO.	%
ALL DWELLING UNITS	25,444	100.0
1-FAMILY DETACHED	928	4.0
1-FAMILY ATTACHED	155	0.6
2-FAMILY SIDE BY SIDE	78	0.3
2-FAMILY	2,140	8.1
3-FAMILY	1,656	6.5
4-FAMILY	758	3.0
1 TO 4-FAMILY WITH BUSINESS	4,174	17.8
5 TO 9-FAMILY	4,289	18.0
10 TO 19-FAMILY	9,008	36.4
20-FAMILY OR MORE	17	0.1
OTHER DWELLING PLACE		

に浴してきた。「というのは、賃貸の単価は、黒人に貸した方が50%も高かった」からである(同上:181-186)。「黒人街の不動産所有者は、過度の密住をつくり、そして過度の暴利をむさぼることができる」(Baran, P. & Sweezy, P. M., 1966=1967, 小原敬士:319)。黒人の流入は白人が居住した近隣を解体させる圧力となった。そして、ウッドローンはスラムの様相を帯びてきた。ウッドローンは「高校を退学した者たち, 犯罪, 失業, そして高い割合を占める生活保護者の目立つ地区となっていく」(Rose, S. P, Spiegel(ed), 1964=1975, 田村明訳:181-186)。

しかし、すでに述べたように、それだけであれば、合衆国にはほかにも似た地域がある。ウッドローンはなにゆえに関心を集めたのか。ウッドローンが人々の関心を集めたのは、この地域が都市更新=再開発の対象とされたとき、更新に対抗するためにアリンスキーが招聘され、彼によってウッドローン・オーガニゼーション(TWO)が創られたことによる(Silberman, C. E., 1964, Fish, J, H., 1973, 西尾勝, 1975)。ウッドローン・オーガニゼーションは、アリンスキーの独特な運動方針、「アリンスキー戦略」によって一躍注目される存在となった。

もちろん、都市更新=再開発はシカゴ市だけで行われたものではない。またウッドローン地区だけで行われたものでもない。それは、第2次世界大戦後、広く合衆国で展開されてきた。シカゴ大学の北側に隣接するハイドパーク、ケンウッドも都市更新=再開発の対象となった地区である。ハイドパーク、ケンウッドは都市の更新=再開発に成功した事例と認識されているが、シカゴ大学の南側に位置したウッドローンは、それと対照的に、都市更新=再開発が当該地域に紛糾と混乱をもたらした事例と認識されている。ハイドパーク、ケンウッドが都市更新=再開発に成功し、ウッドローンが問題の地区となったことには理由がある。ハイドパークやケンウッドとウッドローンはコミュニティとしての性格を異にした。ハイドパークやケンウッドは、シカゴ大学の研究スタッフも居住し、シカゴ大学と一体化していた地域であったが、ウッドローン

は、絶えざる黒人の流入があり、黒人のコミュニティと化していた地区であった²⁾

物理的距離の近さとは別に、ウッドローンとシカゴ大学は分離されていた。シカゴ大学のキャンパスとウッドローン地区の間に設けられている広大なグリーンベルトは、シカゴ博覧会がシカゴ市を会場として行われた時、防火を目的に作られたものであるが、それが作られた目的とは別に、これ以南の地域、ウッドローンがシカゴ大学の位置する地域とは別の世界であることを主張しているかのようにであった。それを現実のものとしたのはシカゴ市とシカゴ大学の動きであった。シカゴ大学は、1961年に、キャンパスの南側約一マイルの帯状地域を再開発し、ここに新たに南キャンパスを建設する構想を発表した (Silberman : 1964, Fish : 1973, 西尾 : 1975)。そして、ウッドローンとシカゴ大学は、シカゴ大学のキャンパス拡張計画を契機に新しい関係、すなわち、公然とした対立関係に入ることになった。

少しく敷衍しよう。「シカゴ大は50年代の初め以来、中産階級のユダヤ系市民が圧倒的に多いハイドパーク・ケンウッド地区から、第二次世界大戦後に流れ込んだ貧しい黒人たちを追い出すことに主力を注いできた。黒人を追い出したあとには、連邦政府の都市改造計画を利用して他の多くの都市の場合と同様、不潔なくせに家賃の高いスラム街を取り払って、さらに高くつく近代的なアパートを建てるという計画であった」 (Ridgeway, J, 1968=1970, 杉辺・河合訳 : 236-237)。「1952年3月に犯罪が連続して発生したため、ハイドパークやケンウッドなどの地区の住民大会が大学構内で開かれて対策を練ったあげく、五人委員会の発足が決まった。ロバート・ハッチンスの後任のローレンス・キンプトン総長を委員長とするこの委員会の目的は、大学周辺地区をどうすればよいかについて提案することであった。五人委員会はただちに行動を開始して、東南シカゴ委員会という名称の住民組織の創設を提案、都市改造に関してはさらに計画を練ることを約束した」 (同上 : 236-237)。「この計画のねらいは、ハイドパーク、ケンウッドなどの地区から貧困者を、とくに貧しい黒人

を追い出すという、しごく単純なものであった。大学はまず400万ドルを投じて土地と建物の買収に乗り出し、市内で指折りの不動産会社を雇って管理に当たらせた。だがこれらの建物への入居希望者に対しては、レビ委員長をはじめ、東南シカゴ委員会のスタッフが審査を行ったのである」(同上：238)。「ソール・アリンスキーが組織した黒人住民団体のウッドローン協会は、シカゴ大の南キャンパスがウッドローン地区にまで拡大されれば、現在の住宅が取り払われることになるという理由で、大学の計画に強く反対した」(同上：239)。「TWOはただちに、TWOとの事前の交渉なしにすすめられる改造には一切反対する旨を表明するとともに、この新計画についての都市計画委員会の公聴会に300人の住民を動員し、同委員会による計画承認を阻止する試み」に出たのである(西尾, 1975:148-149)。

TWOはある意味で経験の産物である。アリンスキーは、ウッドローンに先立って、組織化に経験を有していた。「アリンスキーにおける組織化の仕事は、すでに、〈ジャングル〉と呼ばれているアプトン・シンクレア地区であった。1938年に、彼はそこで敵対している国内のカトリック・グループたちと、缶詰工場の工員たちを、現在の強力なヤード裏近隣住区協議会に結合させている」(Rose, S. P., 1964: 149=1975, 田村明訳:173)。もう少しヤード地区とアリンスキーの関係についてふれておくことにしよう。「北部都市の中心部はどこでもそうであったように、財団や社会機関や実業家グループなどに後援された組織はもちろん、教会が後援したり参加しているコミュニティ組織がたくさんある」(Sherrad, T. D. and Richard C. Murray, R. C. Spiegel(ed), 1965=1975, 田村明訳:199)。ヤード裏地区協議会はカトリック教会の援護の下に結成された組織の一つであり、その中心人物がシカゴ工業地域財団の専務理事、アリンスキーであった。アリンスキーには、「工業地域財団の組織は、ローマ・カトリックの利益によって支配されており、アリンスキーはその利益に追随している」(Rose, Spiegel(ed), 1964=1975, 田村明訳:175)という批判があるが、それはカトリック教会とアリンスキーの関係をとらえた発言である。とまれ、問題

は地区における教会の動きである。その動きを理解するためには都市の中心部と郊外との関係に目を向ける必要がある。あるいは、言葉を替えて、教会の存在意義と存続可能性に注意を向けることが必要である。教会は自らの存続基盤に危機を意識した³⁾危機を意識した教会は団結した。プロテスタントとカトリックの連合が形成された(同上:177)。組織化に経験をもち、新しい活動の場を求めていたアリンスキーに牧師たちはウッドローンで組織化の仕事に従事するよう促した。ジョン・イーガン牧師(シカゴ大司教区の都市事務局長)は、この時期、「すべての人びとを代表し、彼らに仕え、政治に働きかける声をもった、強力でたくましいコミュニティを組織する必要」を感じていた(同上:176-177)。アリンスキーとイーガン師は1954年に会い、その少し後には、大司教が、シカゴのウッドローン地区にやって来たプエルトリコ人の新参者たちを自立させるための段取りをすすめる仕事に加わった(同上:176)。これを契機にして、イーガン牧師とアリンスキーは行動を共にする⁴⁾。

アリンスキーとアリンスキーの戦略に戻ろう。アリンスキーにとってTWOは既成利益集団に対抗するラディカルの拠点=ウッドローン地区を組織化するための機関であった。付言するなら、「アリンスキーの組織は、先ず初めに、都市の限定した地域、シカゴでは近隣住区とか、隣接近隣住区の集団とか、コミュニティ地区などと呼ばれている地域を、独占的に支配しようと試みる。これらは、従来の伝統的コミュニティ組織とは異なって、社会奉仕をする前に、まず、地域を独占的に支配しようとするのである」(Sherrad, T. D./ Murray, R. C., Spiegel(ed), 1965=1975, 田村明訳:199)。「この組織は労働組合に似て、交渉の代理人である地位を保とうとする。典型的には、自分たちはその地域のすべての市民とすべての利益の代弁者である、と主張する。彼らは、市民を、親を、有権者を、実業家を、納税者を、借家人を、家主を代表しようとする(同上:199-200)。「アリンスキーの組織のもう一つの性格は、すぐにピケをはるとか、家賃ストライキとか、デモや座り込みのような直接的行動手段に頼ることである」(同上:200)。戦闘的・軍事的といわれるやり方である。要する

に、アリンスキー戦略は、これまでにない新しい手法であった。そして、それ故に、戦略の対象となった地域と人々に戸惑いをもたらした。しかし、当の、アリンスキーにとって、彼の手法はアメリカとアメリカ民主主義にとって、極めて正当な問題解決の手法であった。アリンスキー戦略とは、彼の意識にもとづく限り、既成利益集団に対抗してラディカルを貫き、公益を守る計略であった。

その闘争的戦略は、アリンスキーの思想に発している。アリンスキーはウッドローンを、ラディカルという言葉から始める。「ジェファーソンの時代には、デモクラット(民主派)という言葉とラディカルという言葉は、同じ意味をもっていた」(Alinsky, S.. D. 1946=1971, 長沼秀世訳:18)。「アメリカという国は、ラディカルたちによってはじめられたのである。アメリカはラディカルによって建設されたのである。アメリカの希望と未来はラディカルたちの手にあるのである」(同上:30)。「ラディカルとはなにか。ラディカルとは、自分の主張を心から信じることのできる創造的な人間である。共通の善を、同時に、最大の個人的価値とみなす人々である」(同上:30)。「ラディカルはなにを望んでいるのか。かれらは、個人の価値が完全に認められる世界を望んでいる。すべての人がもつ可能性が実現される社会、人が尊厳と安寧、幸福と平和のうちに生きる世界、すなわち、人類の道徳性にもとづいた世界の創造を望んでいるのである」(同上:31)。「ラディカルは社会計画に深い関心をいだいているが、上から下へ伝えられるような社会計画に対しては、疑いをもち、かつ反感をいだいている。かれらにとって、民主主義とは下から上へと作用するものなのである」(同上:33)。アリンスキーはアメリカ建国の理想を思い起こそうという。アリンスキーによれば、個人の価値が完全に認められる世界の創造こそアメリカの理念であった。下から上に作用する民主主義、社会計画こそアメリカの理想とするものであったことを確認しようというのである。彼はこの意識を下敷きにして、組織資本と組織労働者を「資本主義を構成する二つの既成利益集団」(同上:62)とみるのである。彼によれば、アメリカの公益は既成利益

集団によって無視されているのである。アリンスキーにとって、ウッドローンにおける資本とシカゴ市そしてシカゴ大学は既成利益集団そのもの、ウルフ（Wolf, A.）の表現を借りれば「成長連合」の担い手である。あるいは既成利益集団化した存在であり、それらは公益の破壊者であった。

既成利益集団の前に「眠っている」アメリカの民衆、彼がとらえた戦略地区の住民を目覚めさせることこそ、アリンスキーの使命であった。ラディカルに与えられた課題は、「もはや理想はない、というようになった民衆の底知れぬ無関心から、民衆をよびさますこと」（同上：97）である。「現代の都市文明において、われわれ民衆の大部分は、相互に孤独な無名の市民となるよう宣言されている。…民衆の大部分は、自分が地域社会（コミュニティ）の生活や国民としての生活から切り離されてしまっていることをみいだす。そしてかれらは、自分では統制できない社会的勢力に圧迫されて、自己の個人的な目標を社会全体の利益に優越させるような、狭い個人的世界へ入り込んでしまっている。かくして社会全体の目標、社会福祉、国民全体の利益、民主的な生活様式、これらすべてが漠然とした、無意味な、不毛な言葉になってしまっているのである」（同上：99-100）。そうした状況を克服するのは民衆自身の意欲と自覚である。民衆自身の組織が必要である。「民衆自身の組織という意味は、民衆が参加し、所有する組織、さらに、それを通じて民衆が自分たちの利害や希望を表明し、また自分たちの感情や夢までを表現できる組織ということである。このような組織こそが、純粹に民衆の、民衆による、民衆のための組織、すなわち、まさにその性格から、ダイナミックな民主的な思想を形成し、表現する組織なのである」（同上：104）。民衆組織の建設はいかにして可能になるか。アリンスキーは、民衆自身によって、民衆のリーダーによって可能になると考える。「民衆組織の建設は、民衆自身によっておこなわれてはじめて可能になる。民衆が自分の意思や希望を表現出来る唯一の道は、自分たちのリーダーを通じてである。自分たちのリーダーという意味は、その地域の人々自身がリーダーとみなし、尊敬できる人のことである。地元から自然発生的にでてく

るリーダーは、民衆組織の建設にとって根本的に重要なものである」(同上：129)。

いまや既成利益集団は公益から距離を持つ。そして既成利益集団は民衆から距離を持つ。組織された資本，組織された労働組合，組織された宗教，それらはいずれも民衆から距離をおく既成利益集団である。民衆が既成利益集団に従属する自己の存在に目覚めることがない限り，既成利益集団に対抗する民衆組織と民衆組織を建設するリーダーを持たない限り，また，民衆自身がつくるプログラムを作成する機会を持たない限り，民衆は既成利益集団の抑圧から解放されることがない。アリンスキーはそう確信する。

1949年の住宅法とアメリカ

(1) 1949年の住宅法と成長連合

ウッドローン問題の背景にあるものは何か。端的に言えば，それは，アメリカとアメリカ資本主義の抱える構造的矛盾（建国当初から人種的・民族的な差別の構造をもって構成されたアメリカ，アメリカ資本主義の発達に不可避であった安価な労働力の受け入れと，独占段階においてより一層顕著になった階級社会アメリカの矛盾）であり，それらはいずれもアメリカの歴史に深く根ざした問題である。アメリカとアメリカ資本主義の構造矛盾が，「都市」に集約的表現をもって噴出した，それがウッドローン問題であり，その焦点は，第2次世界大戦後のアメリカ資本主義の都市政策と，そこに半ば必然性をもって現れた地域組織家，ソール・アリンスキーの採用した「アリンスキー戦略」であった。

第2次世界大戦後のアメリカは，国内では経済の拡大的發展＝成長が求められ，国際的には米ソ対立という国際情勢の中で勢力拡大を図り，資本主義陣営の優位を確保することが求められていた。1949年の住宅法はそうしたアメリカの産物である。1949年の住宅法は戦後アメリカの資本主義が要請した「都市」政策であった。ウッドローン問題も1949年住宅法と密に関連する。以下，

些か長い記述を、アラン・ウルフの指摘（Wolf, A. 1981=1982, 杉本正哉訳）から「ノート」風書き出ししてみることにしよう⁵⁾

1949年の住宅法は、「その第1部では都市の住宅問題に対する戦後の方針を打ち出し、大規模な都市改造計画の基礎となった。第2部は都市近郊の開発に関するもので、すでにレビット・タウンなどに現れ始めていた新建築住宅の購入者への政府の抵当融資などを盛り込んでいた」（同上：136）。1949年の住宅法は、「アメリカ史上最大の浪費的公共事業の一つであった。それはアメリカの都市の破壊の資金をまかなう一方で、政治家、銀行家、デベロッパーたちを結合させる強力な連合体をつくり上げた。…同法の通過は平等にとっての勝利ではなく、貧困者にとっての勝利ではなおさらなかった。…それは改革に代わるものとしての成長の登場を示すものであった」（同上：140）。「連邦政府の資金が都市に流れ込む一方、都市の住民は郊外に流れ出た。戦後の郊外の実態はかなりの程度まで1949年住宅法第2部の産物であった。その抵当融資にもとづいて政府が与えた補助金は、公共住宅建設に対する政府補助金をはるかに上回っていた。そして第2部にもとづく資金の大半は郊外に流れたのである。…1949年住宅法以前は、家屋建設・不動産業界は競争が激しく、アメリカでは独占化されていない数少ない産業の一つであった。それが連邦政府の資金流入で変わってしまった。ウィリアム・レビットのようなデベロッパーたちは政府の援助なしには、その大量生産住宅を建てることも売ることもできなかったであろう」（同上：152）。「住宅法にもとづく政策が計画立案者たちが唱えたのとは正反対の結果を終始うんだのは驚くに当たらない。たとえば、住宅不足解消を目指した国家的住宅政策は、人々に住宅を与える以上に、人々から住宅を奪ったのである。…1960年までに全体で約140万戸の低家賃住宅が取り壊されたが、建て替えられたのは4万戸にすぎず、しかもその95%までが中・高額所得層のためのものであった。^{原注38)}しかも、都市政策を打ち出すためこの法律は、郊外を栄えさせて都市を衰弱させた。都市が住みよくて安全な場所でなくなっていくことに対して、1949年住宅法は他のいかなる法律にもまして

大きな責任がある」(同上：156)。「成長政治がもっていた異常な魅力の一つは、それが特権階級に一層の特権を与え、しかもそうするのは貧困への関心からであるようにみえたことであつた。だが、このようなユートピア的幻想は、事実であるにはあまりにも結構すぎて、長続きするはずがなかつた。現実には、かつて人種的に統合されていた都市が、連邦政府の政策の結果、人種差別的になりつつあつた。^{原注39)}…1964年以降、貧しい人々が街頭に出て、中でも都市再開発、ハイウエー建設、医療産業の誕生の影響に対して彼らの怒りをぶちまけた時、彼らは成長連合をストップさせる力を始動させたのである。…もし1940年代後半に改革のプログラムが実施されていたなら、1960年代の暴動騒ぎはけっしておこらなかつたであろう」(同上：157-158)。「アメリカの方々の都市における暴動騒ぎに刺激され、国内を改革した人として歴史に名を残そうと決意したジョンソンは、「偉大な社会」の構想を打ち出し、貧しい人々に対して、彼らの生活に影響を及ぼすような決定には一部参加させることを約束した。…ジョンソンは1965年秋臨時調査委員会を設けて、1949年住宅法の乱用を防ぐ立法措置を勧告させることにした。MITのロバート・ウッドを委員長に、ブルッキングス研究所や成長連合それ自体や公民権運動などから選ばれた一流の専門家で構成された同委員会は、劣悪な住宅事情に統制のとれた攻撃を加えるために、2、3の実験都市を選び出すことを提案した。ジョンソンは少し手を加えてこの勧告を採用し、1966年1月26日議会に〈モデル都市〉法案を提議した。…議会はジョンソンからモデル都市提案を受け取るやいなや、成長連合の力が損なわれないようにするためにそれを修正する作業に励んだ…モデル都市法案は議会を通過するまでの間に、乱用を抑えるのではなく、成長連合を拡大するための法律になってしまったのである」(同上：160-161)。

以上、あえて、些か長い引用を試みたのはほかでもなく、アラン・ウルフの指摘には、1949年の住宅法の意図したところが、的確に記述されているからである。第二次世界大戦後のアメリカ資本主義と都市問題、そして対外援助と開発援助には1949年の住宅法が深く絡んでいる。住宅法の根底にあるもの、

それは、「成長」の追求であった。この成長を追求するために、「アメリカの政界においては新しい連合が権力を握ることになった。この連合は、経済の独占部分に受け入れられるようなマクロ経済政策を通じて、経済の全般的拡大を図ることを提唱した。成長で生まれた余剰を使って貧困者や少数民族を救済することを、この連合は提案した」(同上：41)。この連合は新しい外交政策も打ち出した。「新しい連合は経済の高度成長にもとづいて、アメリカの経済的ヘゲモニーの下での世界の再編成と、アメリカの影響力を確保するための軍事力とを結びつけた外交政策を打ち出した。最後に、新しい連合は対外援助と開発援助を通じて政界の貧しい人々を成長という機構に組み入れようとした。この「成長連合」が打ち出した目標はとてつもなく大きなものであったが、拡大する経済の下では何事も可能のように思われた」(同上：41)。

しかし、そこにアメリカの落とし穴があった。〈成長連合〉のアメリカは、内なる戦争＝スラム・クリアランス（住宅政策）と、外なる戦争＝世界の軍事支配（ベトナム戦争）を同時に遂行しなければならない羽目に陥った。アメリカが行った内と外の二つの戦争は、アメリカを泥沼に引き込んだ。ウッドローンにおいて採用された「アリンスキー戦略」が、アジアにおいて採用されたという事実を単なる偶然と見ることはできない。〈成長連合〉は内外で目論見の同じ戦争を遂行し、その手法に対する抵抗を経験したのである⁶⁾。

(2) 都市と郊外—社会的空間の総体的再生産—

レヴィットタウンに象徴される郊外はしばしば「豊か」なアメリカの象徴として語られる。郊外は繁栄するアメリカ、豊かなアメリカの反映であり証である。「レヴィットタウンから、すべては始まった。ビル・レヴィットが全居住区を大量生産する方法を仲間に教え、ヘンリー・フォードが車を作る要領で家を建てるコツを示して以来、アメリカは止まることを知らない郊外開発騒ぎに突入した。…レヴィットタウン。これ以前にも郊外はあった。…だが5千年に及ぶ文明の歴史のどこにも、レヴィットタウンのようなものは存在しなかった」

(Rosenbaum, R., Esquire Associates(ed), 1983=1988, 常盤新平監訳: 42-44)。郊外の豊かさは都市あるいは都市に顕在する貧困と対照的であったが、その特徴は、もうひとつ、それが〈大衆的〉であるというところにある。「現在進行しているのは郊外の大量生産である。とりわけそれはアメリカにおいていちじるしい。いまや郊外は誰にでも手に入るものとなった。…さまざまな所得水準の人びとに向って、郊外の生活様式は、直接的に広告になったり、読み物になったりして、人びとの前に提供される」(Riesman, D. 1964=1968, 加藤秀俊訳: 131-32)。「現代のおびただしい数の郊外居住者にとって、第二次大戦後の実際の経験は、彼らが戦時中にいだいていた期待をはるかに上回った豊かで解放的な経験であったという事実である。彼らにとって、郊外というのは、巨大なスーパーマーケットであった。そこには、品質保証済みの、しかも品数の豊かな商品が、あまりあるほど豊かに、そして便利にストックされている」(同上: 120)。

郊外は豊かなアメリカの象徴であったが、仔細に観察すると、手放しで喜ぶことのできない事態も生起させていた。郊外に象徴されるアメリカの豊かさは、都市における「接触項の縮小」を導き、郊外に「凝集家族」を生起させた。セネット (Senett, R.) は、そこに、郊外の歴史的役割を認めている。「豊かさは、共通のアイデンティティの願望をかたちづくるうえで、微妙でしかもかなり危険な役割を演じる。というのも、貧しい時代のコミュニティでは、諸個人や家族のあいだで物を共有することは生存にとって必要な要素だったからである。…このような共有の要求が消滅することは、豊かさを示す刻印である。各家族が真空掃除機、炊事用セット、自動車、水や高熱等々の設備もっている。人々は完備し、自立した家庭に引きこもることができる。こうして社会的相互作用の必要性、共有の必要性は、豊かなコミュニティにおいてもはや人を駆りたてる力ではなくなる。…別の言葉でいえば、豊かさは、互いの要求よりはむしろ類似性という文脈で社会関係を考える道を開くと同時に、共同の接触という点では孤立をつくりだす力を増大させる」(R. Senett, 1970=1975, 今田

高俊訳：50-51)。

「接触項の縮小」と一対にみられる現象は、「凝集家族：凝集性のある家族」の生起である。「凝集性のある家族生活とは一体何を意味しているのか。前世紀を通じて消滅した中産階級の家族の凝集性の条件は、二つの構造的な特質にある。その第1は、家族内で生まれる相互作用が、社会的世界の全般に存在するすべての相互作用の小宇宙であると見なされることである。これは、社会関係において真に「重要」なもので家庭という境界内で経験されないものは何もないという考え方である。…凝集性のある家屋生活を作り出す第2の構造的な特質は、家族の成員を平等化しようとする動きである。…その感情は、最も一般的に言えば、父親が息子たちの「友達」でありたいと願ったり、母親が娘たちの「姉」でありたいと願ったりすることのうちにある。両親は青年の社会から排除されると、まるで大人になることによって汚されたかのように落伍感や不名誉の感じを抱く。このような方向をもった良き家族は、互いに平等な者として語りあい、子供が無遠慮さを忘れようと努めるような家族である。そこでは、家族、家族成員すべての尊厳さは、独立性と独自性を相互に尊重しあうことのなかに存在するものであるとは認識されていない。尊厳さは、各人を平等に扱うことにあると考えられている。」(同上：63-64)。「この凝集家族の形態は、成人を青年期のパターンに凍結しようとする手段である。この家族の秘密、つまり融合への切なる憧れ、あらゆる種類の緊張と隠れた罪の感情を産みだしているところの、内部分裂に対する恐れこそ、青年期に発達したアイデンティティ形成の力に依然としてとらわれている人々の感情的表現にほかならない」(同上：69)。郊外は、「接触項の縮小」と「凝集家族」を集約する。「大不況、戦争、地価そして人種的恐怖といった歴史的環境は、すべてある役割を演じてきたことは事実である。しかし、それらはすべて郊外生活の良さをもたらした過去数十年における、より中心的な変化の派生物にすぎない。そしてこのさらに深く、隠されている要素とは、都市の内外でなされる家族生活の運営についての新しい態度なのだ」(同上：72)。

家族生活の運営についての新しい態度、そこにこそアメリカが経験しつつある変化—深層部において動く変化—がある。それを集約するのが郊外であった。郊外という都市の空間はそこに「郊外的生活様式」といわれる新しい形も生起させている。レヴィットによる住宅の供給はそれ自体が新しい形であったがそれにもまして新しい動きは生活様式である。ローゼンバウムによればレヴィットは住宅革命に重ねて新しいコミュニティ、コミュニンの創出を意図していた。「レヴィットの住宅革命は、単に、資金面の解決や各ユニットの生産にとどまらなかった。レヴィットはすばやく家を建てただけではなく、コミュニティを創りだしたのだ。…コミュニティの暮らし。そんなものは超えていた。それはコミュニン、マス中産階級のベビーブーム生産孵化器というべきコミュニンだった」(Rosenbaum, R., Esquire Associates(ed), 1983=1988, 常盤新平監訳:50)。ローゼンバウムは、それを、レヴィットタウンナーの週末様子としてとらえている。「ホーリスが子供を連れてきて、フィリップの二人の子供と同じベッドに寝かしつけたあと、ギターを取りだして弾き続け、みんなで一晩中合唱したのさ。いとくが、ぼくら四人組は実にうまく助け合っている。女どもがガーデン・クラブの会合に行くときは、男どもが子守をしながらピクナル(トランプゲームの名)をやるんだ。みんな揃ってヴィレッジ・グリーン的小区をやりに行く晩もある。今は全員が週に一晚、成人教育のクラスに通っているよ。デイクとぼくは『屋根裏部屋の完成法』のクラスに出ているし、ジョンは写真を勉強中だ」(同上:50)。リースマンのような社会学者はそれを第一次集団及び血縁集団への欲求、あるいは何らかの形で人びととフェイス・ト・フェイスの関係を結びたいという欲求として説明した。「なぜ人びとは都市を離れるのか。離れて何を求めようとしているのか。彼らが新しい郊外で求めているものは、いったい何だろうか。最低限生きてゆくことができるという保障がすでにアメリカにはある。そして、アメリカ人は比較的生産性の高い経済をつくりあげることに成功していた。そして政治もそう不安定ではない。そこでは長い間にわたって抑えつけられていた人間の欲求が目覚めること

ができた。その欲求のひとつというのは郊外の中にはっきりとみることができ
るものである。それは第一次集団及び血縁集団への欲求、あるいは何らかの形
で人びととフェイス・ト・フェイスの関係を結びたい、という欲求である」
(Riesman, D. 1964=1968, 加藤秀俊訳：148)。郊外は、第一次集団及び血縁集
団への欲求、あるいは何らかの形で人びととフェイス・ト・フェイスの関係を
結びたい、という欲求が支配する、ローゼンバウムによれば郊外はコミュニ
的な新しい生活様式であった。コミュニ的生活様式への希求はオーガニゼー
ション・マンの持つ「根無し草」的な、「家郷喪失者」(Whyte, 1956=1959, 阿
部・藤永・辻村・佐田：106-108)と密接である。根無し草や家郷喪失者は第
一次集団の魅力、既に大都市では失われた魅力に敏感である。フェイス・ト・
フェイスの関係、人間的緊密性は根無し草と家郷喪失者の夢であった。ホワイ
トはパークフォーレストへの移住者が「恐ろしく活発な社会的雰囲気」(同上：
134)を發展させていることを販売業者が見逃さなかったと指摘する。「開発者
たちはすぐさまこれを見て取った。彼らは最初、パークフォーレストを住宅設
定地として宣伝していたが、今や幸福を売り物にし始めた。「パークフォーレ
ストでは、あなたは帰属感をもつことができます。私たちの町に脚を踏み入れ
られるや否や、あなたは気付くでしょう。あなたは暖かく迎えられ、大きなグ
ループに仲間入りでき、孤独な大都会にかわって、友情に溢れた小さな町で生
活することができ、あなたなしではすませない友達をもつことができ—そして
その人たちとの交際を楽しむことができることを。さあおいでください。パー
クフォーレストの精神がどんなものであるかを見つけだしてください(同上、
パークフォーレストの住宅会社の広告。1952年11月8日)。「一杯のコーヒー
それはパークフォーレストのシンボルです。パークフォーレストでは、コーヒ
ーポットが一日中湯気を立てています。この友情のシンボルは、お隣り同士が
互いのかわりを楽しんでいるかを物語るものです。—その人たちはお互いに毎
日の楽しみを分かち合うこと—そうです、憎しみもまた分かち合うことができ
ることを嬉しく感じているのです。小さな町の友情に花咲くパークフォーレス

トにおいでなさい—しかもなお、あなたは大都会にこんなにも近く住んでいるのです」(同上、1952年11月9日)。

ホワイトによれば郊外住宅地はオーガニゼーション・マンの姿にあわせて作られた地域社会であった。それはオーガニゼーション・マンの独特な社会的性格に合わせて個性的であった。ホワイトはかれの著書の冒頭に記している。「このオーガニゼーション・マンということばはきわめて漠然としているが、これから語ろうとする人々については、私は他に適当な呼び名を思いつかないのである。彼らは、労働者ではないし、事務職にある人という意味での、いわゆるホワイト・カラーでもない。これらの人々はもっぱら組織のために働く。そのうえ、私のかたろうとする人々は組織に帰属していてもいる。彼らは、組織の生活に忠誠を誓って、精神的にも肉体的にも、家郷をはなれた中産階級の人々である」(同上：2)。もちろん、郊外の問題は、戦争、地価、人種問題と切り離して論ずることができない。明らかに、アメリカにおける郊外の爆発的發展は、その背後に、戦争(帰還兵)という歴史的な社会問題をかかえていた。郊外は豊かさの象徴であったが、同時に、そこには深刻なアメリカ問題(人種問題)が存在した。アメリカ問題は、何よりも、レヴィットの住宅販売方針に見られるのである。「レーヴィットは、黒人には家を売らない方針を守った」とローゼンバーグはいう(Rosenbaum, R., Esquire Associates(ed), 1983=1988, 常盤新平訳：60)。なぜか。それは、レーヴィットが、「住宅問題を解決することは可能、人種問題を解決しようと努力することは可能。だが、このふたつを一緒ににはできない」(同上：60-61)と考えていたからである。郊外におけるアメリカ問題は、しばしば、三つのF(3F: Fear, Fight, Flight)として説かれている。白人は、黒人の進入を恐れ、闘い、そして逃避した。それは郊外住宅に寄せるレヴィットの営業方針と合致する。逃避の先に多くの建設された郊外があった²⁾

郊外の豊かさは苦悩するアメリカの姿である。リースマンはいう。「今日の都市は、多くの人々に犯罪、不潔さ、人種的緊張といったようなものを連想さ

せる。それは、文化と機会の象徴でなくなってきたのだ。小さな町から大都市に流入してくる人びとがあることは事実だ。だが、それより多くの人びとが、都市から郊外に逃げ出しているのである。」(Riesman, D., 1964=1968, 加藤秀俊訳:122)。郊外への逃避は、都市の危機を意味していた。そしてアメリカの危機を意味していた。郊外への逃避は、都市が分裂していることを、したがってアメリカが分裂していることを意味していた。アメリカは分裂の中に豊かさを実現したのである。少なくとも成長連合にみる限りそうであった。すでにみてきたように、成長連合の目標は都市であった。外延化する都市、「郊外」を含む都市全体が成長連合の標的であった。ルフェーブルの認識は正しい。「空間の生産は、それ自体ではなにも新しいことではない。支配的集団は、つねに古代都市や田舎（のちに〈自然らしく〉見えるような風景も含む）という、ある特定の空間を生産してきた。新しいのは、社会的空間の総体的かつ全体的な生産ということである。この生産活動の途方もない拡張は、その拡張を生み出し、支配し（惜しげもなく）空間を利用するひとびとの利害関係に応じて行われる。資本主義は息もたえだえのように見れる。だが資本主義は、空間の征服のなかに、ありふれた表現をつかえば、不動産への投機、(都市内外の)大土木工事、空間の売買のなかに、新たな安らぎを見出したのだ。都市計画はこの途方もない操作を隠している」(Lefevre, H. 1970=1974, 今井茂美訳:192-193)。資本主義の現代的推進者、成長連合は、都市に資本主義の延命を求めた。スラム・クリアランス、アーバン・リニューアルという名の都市再生事業は成長連合の要請を受けて展開され、郊外の開発による住宅需要を創出した。

もう少し述べよう。成長連合にとってスラム・クリアランスと同時に、新たな投資が期待される郊外の開発も重要なテーマであった。かつて一握りの人々が成功の象徴とした郊外は広く中間層に解放されることになった。そしてアメリカの繁栄を象徴する存在、あるいは、アメリカ人の新しい生活様式を導く価値となったのである。もちろんその価値が下層市民のそれではなく中産階級のそれであったことはいうまでもない。スラム・クリアランスも、しばしば、ガ

ンスがいうように、特定の階級・階層、中産階級が追及する価値に導かれていた（Gans, H., 1962）。荒廃地域や細民屈の拡大と郊外の発達は別のものではない。バランによれば、それは、「同じ鑄貨の二つの面」（Bran, P. A. & Sweezy, 1966=1967, 小原訳：364）であった。「あの街もこの街も、あの界限もこの界限も、つぎつぎに不潔、密住、荒廃といったようなものの餌食になってゆくにつれて、割合に暮らしの楽な住民は、どこかほかのところに移ってゆく。そして、都市のよい地区では、地価が高く、アパートや一戸建ても住宅も、したがって値が高く、実際、ほとんどの金持ち以外は誰も手が届かないから、生活空間が必要な子供をもつ中産階級の世帯は、町の外へ出てゆく。その結果、戦後には、…大規模な国内移住がおこった」（同上：364-365）。そして、郊外は、郊外的生活様式、アメリカの豊かな生活様式の象徴となった」（同上：365）。「電化台所と洗濯機、二つ以上の浴室、騒ぎ部屋、居間、玄関先の芝生、そして車が2台入る車庫をそなえた郊外の家屋が、アメリカのゆたかなく生活様式」の象徴となり、見本となった」（同上：365）。

もちろんバランも指摘を忘れなかったように、全ての郊外がこのようなものであったわけではない。しかしながら、郊外の発達がアメリカ資本主義の発展段階と密接であったことは明らかである。アメリカ資本主義の発展段階はそれに対応する都市のあり方を要請し、丸太小屋の生活様式と対照される、新しい生活様式を創造した。第2次世界大戦後に生起した郊外の爆発的成長は、「横に広がるフロンティア」から「縦に伸びるフロンティア」への転換（アメリカ資本主義の独占段階：都留重人）を示すものであり、郊外的生活様式といわれる新しい生活のスタイルは、とりわけ資本主義における輸送の発達、資本主義の独占段階を象徴する自動車産業の発達がもたらしたものであった⁸⁾

都市問題と都市政策—公共的市民文化形成の可能性—

(1) アリンスキー戦略の意義と限界

ウッドローン問題は、確かに、都市政策をめぐる権力と住民の対立・対抗と

要約することができるであろう。しかし、それはウッドローンという地区に固有のできごとというわけではない。すでに繰り返し述べてきたように、いくつかの都市で目撃される一般的な問題を、シカゴの、そしてウッドローンの問題として定着・広めたのは、地区の牧師たちの要請を受けてアリンスキーという人物が登場し、その独自の戦略をもって、権力に対抗する組織を創り出したためである。すでに見てきたように、アリンスキーはコミュニティの組織化に「恐怖」を持ち込んだ。ローズ (Rose) は、アリンスキーの戦略を、「恐怖と敵意の基礎の上に、コミュニティを組織するもの」(Rose, Spiegel (ed), 1964=1975, 田村明訳: 173) だという。事実、アリンスキーは「恐怖の戦略」を意図していた。〈ウッドローン機関〉TWOは「恐れを刺激し、それに焦点を合わせることにより、都市更新計画のスポンサーである他の組織と取引きすることもできる組織」(Wilson, Spiegel (ed), 1963=1975, 田村明訳: 70) であった。もちろん、そうしたアリンスキーの戦略には否定的な評価も存在する。おそらく、ウイルソン (Wilson) の次の見方、「多数の、おそらくは大抵のプランナーと地域組織専門家は、アリンスキーの戦術を拒否する。彼らにとって、アリンスキーの方法は、紛争を避けるよりも紛争を作り出し、悪化させ、市民活動の通常の型の中で行うのではなく、全体としての都市からその地区を切り離し、また共通の利益のために協力的な調査をするよりも、むしろ力の方に気を置くのである」(同上: 70) という見方は、代表的なものであろう。

以下にとりあげるシルバーマン (Silberman, C.) とハウザー (Hauser, P.) の認識が示すように、アリンスキーの戦略については、賛否両論があり、議論の余地がある。ひとつの焦点は「闘争か合意か」という問題である。シルバーマンはアリンスキー戦略の意義を認めアリンスキーを評価する。「アリンスキーはシルバーマンのヒーローであった」(Rose, Spiegel (ed), 1964=1975, 田村明訳: 143)。シルバーマンにとってアリンスキーは特別の存在である。しかし、すべての人がシルバーマンのようにアリンスキーを評価するわけではない。ハウザーはアリンスキー戦略における偏りを指摘する。「民主主義の社会という

ものは闘争と合意との均衡の上に成り立つものである。シルバーマンは、アリンスキーと歩調を合わせ、合意の役割を過少に評価して闘争に重きをおいている。工業地域財団が TWO を組織化した手法は間違いなく合意の達成とウッドローンが達成しようとしている目標の妨げになっている」(Hauser, P. M., 1964)。1930年代に労働組合運動を前提において組み立てられたアリンスキーの戦略が1960年代の黒人コミュニティにそのまま適用されるであろうかというハウザーの懐疑は留意に値する(同上, 1964)。

アリンスキー戦略に対する批判はコトラーにもみられる。近隣を軍事的な組織としてとらえ、戦闘的組織を重視するアリンスキーの戦略にコトラーは否定的である。われわれは、近隣は政治的単位であって、軍事的組織ではないということに気付かなければならない(Kotler, 1969: 8-11, 27-30)。コトラーは言う。「アリンスキーの根本的な間違いは、政治的にうまくいかなかった近隣で軍事的に成功すると考えたことである」(同上: 28)。アリンスキーの失敗は、近隣が本来政治的単位であることを、そして、政治的権威は政治的手段によって獲得することができるということを認めないことである。アリンスキーは、近隣が自然的な政治的単位であることを理解しない。都市の地域すべてが、一様に、警察権力によって統制されていると考えている(同上: 30)ももちろんコトラーいえどもアリンスキーの戦略を全面的に否定しない。むしろ、ある点でアリンスキーを評価する。「近隣組織における軍事的戦略の重要性に注意を喚起したのは明らかにアリンスキーの貢献であった。しかしながら、われわれは、かれの戦略を防御目的のものに作り直す必要がある。…アリンスキーは一元的な政治組織を発展させる必要性を信じていない。そして、その認識が、彼をして、一つの全体として、コミュニティが政治的権威を獲得することを妨げ、各々の同盟組織が権力を要求し、何かを手に入れることを非難させている」(同上: 29)。近隣に対する関心が薄らぐ傾向にあるなかであって、あるいはコミュニティの解体が進むなかで、アメリカ民主主義の根源を問い、権力に対抗する組織化を導いたアリンスキーの戦略には、近隣が自律性を確保する

という視点からみて貢献があったことは事実である。「ウッドローン機関は何を生み出したのか。ウッドローン機関が大学と交渉してウッドローンの北の端に移るようにさせることができたのは確かである。昨年の夏、デイリー市長の事務所で作られた合意書によれば、移された人びとを収容する住居ができるまで、大学は解体作業を始めない予定である」(Rose, in, Spiegel, H. (ed), 1964=1975, 田村明訳: 185)。このような成果は、コトラーも認めるように、アリンスキーの戦略に導かれたものであったとってよい。コトラーはアリンスキーの手法を批判しつつ近隣における自律と自治を確認させたアリンスキーの試みを評価する (Kotler, 1969: 28)。そして、そうしたコトラーの考え方はモデル都市法に関するかれの発言にも示される。「私は道義心の声明として地区政府を提案していない。これは政治問題である。…もし人々が地域支配のために結集し、地域勢力をもつならばあなた方はどうするか。それを粉碎するか、さもなくば彼らに権限を与えるかどうかだろう。私は政治的に言っているのだが、組織された権力である国会が政治的事実に平和裡に即応する唯一の方法は後者をとることである。もし、貧しい地区の人びとが地域の繁栄と正義を築くために地区の自由を必要とするならば、もし彼らが地区支配を必要とし望んだなら、もし人びとを指揮するだけの理由ならば国会は彼らに何らかの適切な権限を与えるべきだ。権限を与えなければ指導することができないし、国民は分裂する。…いくつかの法的権限を地域に移譲することにより地域コミュニティは、地域の生活を改善する計画を築きあげるだろう。各住民が決定権を持てるように、この地区権限は集会と会議でもって民主的に構成されるべきである。それは自由と市民権を意味する。それは国内平和に通ずるすばらしい道である。さしあたっては、近隣地区単位の権限をもとにした大都市圏の各構成単位を作っていくように努力されるであろう」(Kotler, in, Spiegel, H. (ed), 1967=1975, 田村明訳: 288-289)¹⁰⁾

以上、簡単に、ハウザーやコトラーのアリンスキーに対する評価からアリンスキーの貢献と限界について検討した。ところでいうまでもないことではある

が、「問題」を取り巻く状況は変化する。それはどのような問題についてもあることであって、状況を固定的にとらえることはまちがいである。ウッドローン問題についても例外に属さない。アリンスキーの戦略そのものが、状況の産物であった。アリンスキーが採用した敵対心や憎しみに訴えて、組織化を図り内部を強化するという方法は一定の状況と条件の下において有効に作用するとしても、永遠に機能するとは限らない。そのことへの認識を欠如させるとき、ハウザーやコトラーのいうように、コンセンサスの形成を妨げ、その結果、必要な、あるいは獲得可能な成果を得ないままに終わることもある。大社会の状況や政策主体における対応の変化はTWOにも新たな対応を求めてくる。事実、TWOは1970年代に入り変容する。60年代の後半から70年代にかけて展開されたアリンスキー戦略、すなわち、戦闘的＝ミリタリーな手法は、連邦政府の方針転換や、シカゴ市・シカゴ大学の対応の変化によって後退する。闘争的色彩が弱まりコトラーのいうように政治的妥協がみられるようになる(Fish., J. H. 1973,)。モデル都市事業による連邦の政策展開は、それが「当時の黒人暴動等都市問題の激化に対応できず、4年間で廃止された」(佐々木, 1988: 50)けれども、それすら、TWOの活動＝変容に影響を与えている。TWOの変容はTWOを取り囲む社会情勢の変化、わけでも都市政策における方針転換と関連がある。「1949年の都市再開発プログラム、1954年の都市更新プログラムが建物の除去、建設という建設活動を重視していたのに対し、1966年から、ジョンソン政権は、都心部の問題解決には、雇用開発、教育改善等の社会政策を併せて行う必要があるとの観点から、150の都市に連邦政府の政策を集中して行うモデル都市(model city)プログラムを採用した」(同上: 50)。社会的状況の変化からひたすら距離を置き、ひたすら闘争路線を走り続けることは難しい。アリンスキー戦略はアリンスキーという人物の理念と経験を基礎に構築された闘争手法であるが、それは、同時に、そうした手法を生起させた時代と社会の所産であり、アメリカの都市政策とシカゴ市やシカゴ大学といった既存権力の地区管理が生み出したものでもあった。アリンスキー戦略の盛衰は、そ

れが社会的なものである限り、社会情勢の変化に伴う変容もあって当然である。

(2) 公共的市民文化の可能性

ウッドローン問題は、アメリカの社会体制と国家が抱える構造的問題であり、アメリカの社会体制と国家の歴史に生じたシカゴ市がもつ構造的問題であった。ウッドローン問題に関心を寄せる個々の研究者には、そう認識したうえで、ウッドローン問題に関するテーマ＝ウッドローンが問いかけているテーマを意識する必要があるであろう。ウッドローンにかかわる私の関心は〈価値と都市政策－公共的市民文化の可能性－〉にある。ウッドローン問題は明らかに公共性の問題、価値をめぐる問題であった。私見によれば、「公共的な問題」の解決をめぐる価値の対立、それがウッドローン問題の本質であった。ウッドローンをめぐる問題は、都市政策の問題であると同時に、アメリカの文化的目標にかかわる問題、アメリカの理想＝価値にかかわる問題であった。事実、アリンスキーは、この闘争の中で、〈アメリカの理想〉を問題としたのである。

ウッドローン問題に関心を集めた時期、アメリカは閉塞状況にあった。そして価値の分裂を明確にしてきていた。アメリカの矛盾は独占資本 (Bran, P.) によって深められ、闘争を日常化させる土壌が生まれていた。複数の形をとった異議申し立てが生まれた。社会問題に対する制度と制度化された組織・団体の無力化が顕著になった。アメリカの文化的目標と制度的手段が問われる事態が生じた。ウッドローン問題は明らかに都市政策をめぐる公共性の問題、都市政策をめぐる価値の問題であった。アメリカは公共性＝公共の価値をめぐる分裂と対立を生み闘争を発生させた。アメリカは国際的にも正義をめぐる闘い、戦争に介入した。アメリカは内に外に対立と闘争の火種を抱えていた。

一般に都市政策においては、政策主体と連携主体は自らが望ましいと判断する、あるいは追及に値すると判断する「価値」の実現をめざして資源を動員し手段を工夫する。一方、その政策が展開されることによって影響を受ける住民

=とりわけ負の影響を受ける住民は、政策の展開を好ましくないものと判断し、政策が展開されることを阻止しようと試みる。いわゆる反対=阻止の運動である。しかしこれは一般論であって、もちろん、すべてのケースがここにいう一般論に合致するわけではない。都市政策が発動され終結するまでのプロセスには様々な変数が介在する。とまれ、都市政策が本質において価値にかかわるものであるとすれば、価値をめぐる対立・闘争と協調・合意が焦点となろう。ここで、いま留意すべきは、都市政策が、少なくとも建前上、公共性を標榜しているということである。都市政策が目標とする=追及するのは公共的価値であって、私的価値ではない。問題は、公共性を持って追及される価値が、直接・間接に、私的価値の追求に繋がる可能性があるということである。あるいは意図的にそうさせられるということである。公共性を標榜してそこに私的価値を滑り込ませることは可能である¹¹⁾

ウッドローン問題も、基本的には、価値をめぐる問題であった。価値をめぐる対立はしばしば憎悪や恐怖の感情を醸成する。ウッドローンの場合、再開発に恐怖を抱いたのは黒人居住者である。ウッドローンの黒人居住者は、再開発=都市更新が黒人居住者の追い出しであることを、ハイパークなどの経験で知っていた。しかし、それより前、白人居住者は黒人の流入に恐れを抱いていた。かれらは闘い、逃避した。ウッドローン問題は再開発をめぐる対立であったがその根底には相互に対する憎悪と恐怖の感情があった。再開発という「公共的」問題の根底に、相互が対立・闘争を通じて醸成してきた憎悪と恐怖の感情があり、それがさらなる対立と闘争に発展したことは都市政策における公共性の確保が容易でないことを示唆するものである。公共の名において行われる再開発=都市政策が価値の強要を含んでいるという認識はハーバード・ガンズ(Gans, H.)の研究において示されたところであり、民族コミュニティとの関係で言えば、再開発は民族コミュニティの破壊という一面も有していた。その意味で、公共性は価値中立をも、影響者の数の多さも意味していない。

アメリカにおける建国の歴史は、矛盾に満ちたものであった。自由州と奴隷

州の存在が示してきたように、あるいは南北問題が示してきたように、アメリカは構造的矛盾を抱えて国を創り、それを梃にして今日の連邦を発展させてきた。チャールス・ビアード (Beard, C. 1913=池本幸三訳, 1974) の研究が示したように、建国以来、アメリカは階級社会であった。アメリカの複雑さは、階級社会が同時に、人種・民族、宗教、世代という問題を抱えていたことである。アメリカニゼーションはそのアメリカが統一的な国家として存在することに期待を寄せた言葉である。アメリカニゼーションは、アメリカ=メルティングポット説に懐疑の目が向けられて以来、焦点の分散を来たしている。しかし、いまなお、アメリカはそれを信じ継続的に多くの移民を受け入れ続けている。かつてアメリカニゼーションが求めたものは、ドミナントなものへの同化であった。デューイ (Dewey, J.) もそのことに同意していた一人である (内藤, 2001)。デューイにとって「公共」はドミナントの価値であり、アメリカニゼーションはドミナントへの「同化」であった。マイノリティがドミナントに同化すること、そこに「公共」の基準があった。しかし、ライト・ミルズ (Mills, W.) の批判にみるように、同化主義は、ドミナントによる理想=価値の強制という一面を有している。ドミナントの理想を公共的市民文化として固定させることには、アメリカという国の成り立ちを念頭においた場合、少なからず無理がある。そもそも、アメリカは、多様な人種・民族と、多様な価値を追求する人々によって構成される国家であるとみれば、同化をもって公共の基準とすることはできない。むしろ、同化と適応を峻別し、適応を基準として「公共」を追及する作法が必要である。アメリカの都市が、ドミナントの理想=価値を超えて公共的市民文化の形成に向うためにはドミナント・マイノリティの関係とその関係を基盤に構築されている社会構造の検討が不可欠である。

少しく敷衍しよう。アメリカの都市における公共は、「分」と「分限」を前提にしたものであった。リースマンは指摘する。「19世紀の終わりから20世紀の初めにかけて、多くの人々は新鮮な空気を求めて都市を離れたが、同時に依然としてたくさんの人がなおも都市にとどまった。あるいはすくなくとも都

市の中での住居もそのまま持ちつづけていた。社会が高度に階層化され、その頂点にいる人びとが確実な地位をもち、下層の人びとがその分をこころえ、自動車ももたず、また自分たちの居住地の外に出ようともしなかった。…貧しい人びとはみずからその分に安んじ、また金持ちの家の召使としてはたらき、したがって金持ちは保護されていたし、高等教育は相対的に特定の階級だけに限られていた」(Riesman, D. 1964=1968, 加藤秀俊訳: 146)。アメリカ社会=都市における「分」と「分限」は白人地区と黒人地区の境界線にもっともよく示されていた。「1930年代のニューヨーク市では、黒人地区と白人地区の間の境界線がモーニングサイド街を走っていた。…この境界線を超えるのは白人に限られていた。家政婦とときどき通る配達人を除けば、近所の白人地区でまる一日黒人の顔を見ないことさえあった。他方、白人であるわれわれはモーニングサイド街を障壁ともなんとも思っていなかった。われわれは昼夜を問わずどんな時間にも自由にハーレム地区へは行っていいと考えていたし、たかりや暴力に出くわす心配は全然感じていなかった。…もちろんその理由は黒人が分をわきまえていたということである。警察に対する恐怖がこのような従順さを維持する役目を果たしていたことは明らかである。しかし、もっと効果的に統制の役目を果たしていたのは、アメリカの下等人種に属する者は身分が上のものに触れたり脅しをかけたりしてはいけないという暗黙の了解であった」(Hacker, A., 1970=1973, 北野利信訳: 119-120)。「今日では、この事情はいうまでもなくすっかり変わってしまった。貧しい人びとの子どもたちは自分の家に居つかなくなった。家からはなれた子どもたちは犯罪に巻きこまれ、また非行化してゆく。豊かな階級の子どもたちが、このような下からの影響を受けはじめる。そして親たち、すくなくともその親たちである金持ち、すくなくとも中流の金持ちは、このような子どもたちの要求をしりぞけることができない。…親たちは子どもたちをその誘惑から守ることをみずからの毅然たる方針によってするのではなく、特定のコミュニティに移ることによっておこなっているのである。つまり不動産価格が高く、したがって貧しい人びとには入りこ

めないようなコミュニティ、そして学校が彼ら自身とおなじように教育程度の高い人びとによって運営されているコミュニティ、そのような近隣環境によって、親は子どもを保護しようとしているのだ」(Riesman, D. 1964=1968, 加藤秀俊訳: 146-147, Hacker, A. 1973, 北野利信訳)。

郊外は、ホワイトによれば、オーガニゼーション・マンの居住地であった。同質性を志向した、中産階級(凝集家族)の移住地であった。郊外は彼らに用意された居住地であった。郊外は、結婚適齢期を迎えていた復員兵に新しい家庭を用意する住宅地であり、都市の住環境に不満と不安をもつ人々に、新しい希望を与えるコミュニティであった。それは、かつてパークが自然地域と呼んだものとは対照的に、人工的・計画的に創られた地域であった。セネットはいう。「第二次世界大戦後の十年間に、郊外地区がこのような方向で形づくられはじめたとき、デービッド・リースマンらの幾人かの評論家は、そこでの社会関係の無目的性と空虚さを批判し始めた。しかし、そこには特殊な社会関係の絆が隠されていたのである。不可侵の状態に保つこと、人種、宗教、階級あるいは他の〈家庭という良きコミュニティ〉への〈侵入〉について排他的な基準を設けることによって家族の安全性と高潔さを確保することが、一般的な傾向であった」(Senett, R. 1970=1975, 今田高俊訳: 73-74)。豊かさが郊外という同質的な単純化された社会を出現させたということは、重要な指摘である。単純化の源は豊かさであり豊かさがもたらした「凝集家族」である。「凝集家族」というセネットの言葉は接触項の縮小と彼が呼んだ事態と一体である。接触項の縮小と凝集家族を生起させたものが「豊かさ」であった。「さて、ささやかながら富を自分で獲得できる都市の人口がしだいに大きくなると、首尾一貫性や構造的な排他性および内的な統一性への願望が登場してくる。都市の全領域は階級、人種、民族によって地理的に分割され、貯蔵とか娯楽のようなく不体裁な活動は家庭生活から隠されることになる。かくて、コミュニティ・アイデンティティは、人間活動の恐るべき単純化によって達成されることになる」(同上: 50)。しかし、豊かさには危険が潜んでいる。それは社会的接触の減少・

縮小である。「貧しい飢餓の時代のコミュニティでは、諸個人や家族のあいだで物を共有することは生存にとって必要な要素だったからである。…人々を結びつける彼らのあいだの直接の社会的接触を必要とする共同の所有は、歴史的に多くの、多様な都市の近隣住区で同じく特色となっていたのだ。共有可能なサービスや技能や財貨は、具体的な共同の焦点を提供してきた」（同上：51）。豊かさは共有の要求を消滅させる。「人々は完備し、自立した家庭に引きこもることができる」。「社会的相互作用の必要性、共有の必要性は、豊かなコミュニティにおいてはもはや人を駆り立てるちからではなくなる」。「豊かさは、互いの要求よりも、むしろ類似性という文脈で社会関係を考えるみちを開くと同時に、共同の接触という点では孤立をつくりだす力を増大させる」（同上：51）。貧しい人々は生きるために「接触項の複合」が必要であった。自活できる条件をもたない彼らは、多様な関係をもたなければ生きていくことができなかった。しかし、強固で、凝集性のある家族生活は、かつてのようにコミュニティを求めなかった。郊外への逃走を助けたのは豊かさと凝集家族である。多様性を象徴とする都市とは対照的に、郊外の象徴性は単純化であった。単純化した郊外はアメリカの歴史に照らしてどのような意味をもつのか。単純化の根底にあるのは同質への傾斜と異質の排除であり、混一体とした世界からの逃避である。同質なるものへの傾斜、異質なものの排除、混一体的世界からの逃避、そこには「公共」の前提が欠けている。そしてそのことは、アメリカの都市が、公共性の形成というあるいは公共的市民文化の形成という課題、困難な課題の前にあることを意味している。

結語に代えて—合衆国・市民文化の再建とアリンスキー—

かつてミュルダール（Myrdal, K. G.）は、アメリカにおける人種関係を「アメリカン・ジレンマ」と表現した。黒人初の大統領を出して、なお、アメリカはそのジレンマにもがき苦しんでいる。しかし、もがきの中から一つの方向がみえてきた。それは、単なる「手続的参加」を超えた、「実質的な参加」とい

う方向である。「都市の危機をうまく解決するには、都市の住民が、自分たちの住む近隣住区と都市計画および彼らに直接影響を及ぼす社会計画に参加するのが、最も重要な方法であろう。…委員会や行動計画に活発にかかわっている市民が彼ら自身どんなに努力しても、アメリカの荒廃した都市の中心部を、貧困と不真面目から開放し、魅力に富んだ独創的な地域につくり直すことに成功はしないということは、もちろんわかっている。参加という手続き以上のものが、必要である。新しい仕事を作ったり、既存の住宅、保健および関連業務を格上げするという実質的な計画と強化を新たに着手する必要がある。しかし、これらの計画は、その計画と、計画に参加する市民とが、効果的に連結した場合にはじめて成功する」(Spiegel, H.「序文」, Spiegel, H.(ed), 1968=1975, 田村明訳:13-14)。スピーゲルのいう、「参加という手続き以上のものが必要である」という認識においてアリンスキー戦略は貢献した。アリンスキーは形式的参加にとどまる限り真の改良は行われないことを強調した。「民衆組織の建設は、民衆自身によっておこなわれてはじめて可能になる。民衆が自分の意思や希望を表現出来る唯一の道は、自分たちのリーダーを通じてである。自分たちのリーダーという意味は、その地域の人々自身がリーダーとみなし、尊敬できる人のことである。地元から自然発生的にでてくるリーダーは、民衆組織の建設にとって根本的に重要なものである」(再出: Alinsky, S.. D. 1946: 129)。しかし、一方、「新しい仕事を作ったり、既存の住宅、保健および関連業務を格上げするという実質的な計画と強化を新たに着手する必要がある。…しかし、これらの計画は、その計画と、計画に参加する市民とが、効果的に連結した場合にはじめて成功する」(Spiegel, H.「序文」, Spiegel, H.(ed), 1968=1975, 田村明訳:13-14) というところを射程に入れてみればアリンスキーの戦略には限界があったといえるであろう。もちろん、限界はアリンスキーの成果を否定しない。かれはアメリカ問題の解決に向けてひとつの方法を提起した「発題者」であり、アリンスキー戦略は、1949年の住宅法とそこに結集された成長連合、その成長連合が展開する都市政策＝都市更新・スラム・クリアランスに対

する挑戦であった。アリンスキー戦略は、既成の組織・集団への対抗であり、異議申し立て、しかも戦闘的な申し立てであった。アリンスキーにとって、ウッドローンにかかわる資本とシカゴ市そしてシカゴ大学は利益集団そのものの、ウルフの表現を借りれば「成長連合」の担い手、あるいは利益集団化した存在であった。アリンスキーによればそれらは公益の破壊者であった¹²⁾。その挑戦のなかで、アリンスキーはアメリカ建国の理念を持ち出し、アメリカ合衆国の再建と市民文化の再建を要求した。「アメリカという国は、ラディカルたちによってはじめられたのである。アメリカはラディカルによって建設されたのである。アメリカの希望と未来はラディカルたちの手にあるのである。…ラディカルとはなにか。ラディカルとは、自分の主張を心から信じることのできる創造的な人間である。共通の善を、同時に、最大の個人的価値とみなす人々である。…ラディカルはなにを望んでいるのか。かれらは、個人の価値が完全に認められる世界を望んでいる。すべての人がもつ可能性が実現される社会、人が尊厳と安寧、幸福と平和のうちに生きる世界、すなわち、人類の道徳性にもとづいた世界の創造を望んでいるのである。…ラディカルは社会計画に深い関心をいだいているが、上から下へ伝えられるような社会計画に対しては、疑いを持ち、かつ反感をいだいている。かれらにとって、民主主義とは下から上へと作用するものなのである」(再出：Alinsky, S.. D. 1946: 30-33)。アリンスキーはアメリカの建国の理想を思い起こそうという。アリンスキーによれば、いまアメリカは改めて、下から上に作用する民主主義、社会計画とそれを遂行する地域組織に関心を寄せなければならないというのである。

市民社会の再建や市民文化の再建は成長連合を意識して求められるだけではない。伝統的にアメリカの中心にあった近隣と教会の変化＝衰退も合衆国の再建と市民文化の再建を求めている。「ふりかえてみると、アメリカの都市行政は、近隣に対してだんだん関心を失ってきていた。近隣の権利と役割を少しずつ奪って市役所に集中してきたのがこの半世紀の歴史だったとってよい。大都市の周辺の自治体は合併によって政治権力を奪われて大都市の一部をなす

近隣住区にすぎなくなった。貧困な近隣を政治に結びつけていたボス体制は打破されて、権力はフォーマルな制度に統一された。このようなフォーマルなシステムになっても、専門的行政を上手に使っていける有力な近隣住区は満足を与えていたといえるかもしれない。しかし、行政的配慮のゆきとどいていない近隣住区の不満が、近隣政府の考え方に親近感をもつ傾向があるようである」(松村, 1972:24)。周知のように、近隣と教会はアメリカ人にとって、精神生活のよりどころであった。社会事業に中心的役割をはたしてきた教会が近隣と距離を置き、人びとの生活から距離をもったということは、アメリカにとって看過できない問題であった。「社会事業は組織された宗教にその根を持ち、そこから最初の着想を得た。多くの点で宗教と社会事業は、ときに重大な、また、さして重大でない不和や緊張が生じたにもかかわらず、何年にもわたってこのつながりを保ってきた。社会事業は、もともと教会全体から原動力を得たのではなく、…〈金持ちの社会に安楽と不安〉を求めようとした組織的プロテスタントの傾向に反抗しようとした教会内部の運動から力を得たのである。〈レインスフォード師は、プロテスタントの教会が都市労働者階級への関心を失ってしまった結果、1830年から1890年にかけて主導権をなくしてしまったことを告発している」(Sherard, D. & Murray, R. C., in, Spiegel, H. (ed), 1965=1975, 田村明訳:208-209)¹⁹⁾「教会の新しい協力者たちは、貧しい者たちに対する慈悲や奉仕という19世紀的概念を基礎にできないことを認識しなければならない」(同上:208-209)とスピーゲルは主張する。それは、かつての位置を失った教会と社会事業に大胆な変革を求める提言である。

敢えて言えば、アリンスキーは、行政もボスも貧困問題やマイノリティ問題を解決することができない、加えて、生活のレファレンスとして機能してきた近隣もいまその影を薄くしつつある、そういう状況のなかに登場した。アリンスキーをまつまでもなく、近隣・コミュニティの問題が、アメリカにおける都市の再生にとって、アメリカという国家の維持と発展にとって、重要なテーマであることは明らかである。本論の守備範囲から外れているが、コトラーら

の提起する Neighborhood Government と、1949 年以降における近隣・コミュニティに対する研究についても検討と整理が必要である。

原注

原注 38) Gelfand, A. *A Nation of Cities*, pp 208, 209, 215.

原注 39) Lowi, *The End of Liberalism*, pp 250-283.

注

- 1) ウッドローン問題への言及に先立って、私にとっての「ウッドローン」を記述しよう。私にとってウッドローンは、懐かしい〈地区〉である。同時に社会的関心を刺激された地区である。私はウッドローンを二度訪問する機会を得た。そして短期的ながらそこに滞在した。ウッドローンにおける私の滞在先はデイヴィス (Davis, E) 牧師の住まいであった。私は、富田富士雄先生 (関東学院大学教授・学院長) ご夫妻からウッドローンに関する話をお聞きするまではウッドローンに対する知識をもっていなかった。私は富田先生ご夫妻のご紹介でデイヴィス牧師に接し、その後、ご厚誼を得ることとなったが、二度目の訪問時には家族揃っての滞在であった。富田静子先生の書かれた「デイヴィス宣教師のこと」には次のような記述がある。「ミス・デイヴィスはアメリカ・バプチスト教会のホームミッショナリーであった。彼女の家には何冊ものゲストブックがあって、その中に日本人の署名がたくさん出てくる。岡本千秋氏、金子三郎氏などわたくしたちにも親しい名前があり、飛鳥田一雄元横浜市長、内藤辰美氏、その他の学者たち、また私の夫富田富士雄もここを訪れている。… (中略) …私は 1969 年の 7 月、8 月と 1970 年の 2 月にこの家 (デイヴィス宣教師宅) に滞在した。…デイヴィスのアパートはシカゴ大学のキャンパスに近く、黒人街に接していた。当時シカゴは都市再建計画に入っていて、その黒人街は取り壊されて新しいアパートが建てられるということであった。住民には住居の先取権があるが家賃はかなり高額になるという話であった。不安や怒りで、その黒人スラムは町全体が荒れていた。道路には紙屑や酒の空き缶が散らばり、昼間も夜も喧嘩の音がひびいた。少年たちがグループでナイフを投げあって、窓ガラスのこわれる音、中から怒鳴る女の声、パトカーのサイレンなど、時には深夜にピストルの音さえ響いた」(富田 1992: 3)。
- 2) 「しかしながらプランナーが更新の必要ありと思っている大抵の近隣地区は、シカゴのハイドパーク、ケンウッドのようではない。…大抵の更新地区は低所得でしばしば黒人地区であり、その住民の多くは、ハイドパーク、ケンウッドの国際人的エリートからくると、ほとんどすべての点で反対である。このような人々は、長期的展望を持たず、具体的な経験から抽象化することは苦手で、都市単位を扱う機関を信用せず、個人的でせつな偏見を持ち、また教会以外のいかなる種類の組織への愛着もほとんどないようである。

彼らは経験不足で、組織に参加する技術に欠け、組織に対しても個人的効用という低い考えしかない。性質によるばかりでなく必要性からも、これらの人びとは、普通市民活動の主体であるよりもむしろ客体である」(Willson, J. Q., Spiegel (ed), 1963=1975, 田村明訳: 68)。なお, Peter H. Rossi and Robert A. Dentler, *The Politics of Urban Renewal-The Chicago Findings*, Free Press of Grengo, 1961 は, シカゴにおけるハイドパーク・ケンウッド地区の更新問題を扱った文献として知られている。矢崎武夫もロッシとデントラーによる著書をシカゴ学派における新しい時代の研究例としてとりあげ注目を促したことがある(矢崎武夫「シカゴ学派の都市研究動向—人間生態学を中心に—」明星大学研究紀要—人文学部—第21号, 1985年)。

3) 「牧師たちは、一つの明らかなパラドックスに深く悩まされていた。教会の会員は、特に郊外では今までの最高にまで上がった。そして協会はどこでも全体的に、人が殺到していた。…その代りに都市は過渡期になっていたので、既存の教会が都心部に急速に増えている見捨てられた低所得者たちとの実のある関係を維持したり、激烈な社会論争において、倫理的な指導性をとることができない、ということに気づくようになった。自由主義神学の代弁者たちや、新たに生まれつつある若い教会の指導者は、今日の社会運動のただ中で、教会が影響力のある地位を維持したり取り戻したりするためには、社会正義のための闘いに宗教団体が精神的な指導をとらなければならないということ、をはっきり認識した。本当の意味で、教会は、広い北部都市の中心部の、特に日の当たらない地域の黒人も白人も含めた住民の忠誠心、献身、約束を得るための競争をしている。…しばしばそれは、ある地区の非宗教勢力に対する、攻撃的な全教会主義の結末という形をとるように思われる。それは、市役所に関する戦いとか、ささいな汚職、あるいは経済上の悪習(シカゴやクリーブランドやデトロイトにみられるような)に対する戦いとして表現される。…教区民の数の減少と人口の変化により都心部の教会の勢力は低下し、プロテスタントもカトリックも、より広い支持者を当てにするようにさせた。…都心地区の教会のこうした現象の一つには、プロテスタントとカトリックの両者、特に地元カトリック教区とその教会、学校、社会施設が所有していた不動産の経済的損失という面で、説明される。…アメリカのキリスト教会の全国会議は、その地元伝道部門を持っており、たいがいの教派は同じような部門をもっていたが、都心部の牧師たちは古い伝道方法によってスラムの住民たちとの真に生産的なつながりを作りあげることができなかったのは、既存の教会が近代の都市低所得者たちを疎外してきたことを示している。…これらの牧師たちは、新しい世俗の社会を創り出すことによって教会の適切さを証明するために出発したのだ」(D. Sherard, T. C. and C. Murray, R. C., Spiegel (ed), 1965=1975, 田村明訳: 195-197)。

4) 「地区の牧師グループから正式な招待を受けてから、工業地域財団はウッドローンに入った。組織化の仕事は、エミール・シュワルツハウプト財団とローマ大司教と、全国連合長老教会伝導本部によって支援された。…ここでの工業地域財団のやり方は、戦略的にはまったく自由に振舞った。急にできたウッドローン機関は、ゆっくりやるようにとか、直接行

動を慎むようにという郊外地区のような理事会を持たなかった。それは、現状を闘うために現状から生まれた機関だったのだ。…ウッドローン機関の初期の計画では、家賃ストライキと量目不足の商人への抗議行進などをやっていた。アリンスキーが「我々のコミュニティは原子力をもった」と呼ぶものが、1961年8月26日の土曜日に行われた。ちょうどその日は、2,000以上ものウッドローンの住民が、バスを連ねてシカゴ市役所へ、投票の登録に出かけた。そのデモは、コミュニティの士気をすごく高め、見ていた人に言わせるとウッドローンの最も発言権のない人さえもが、自分は参加しているという気持ちを味わった。ついでながら、ウッドローン機関が活発に参加した唯一の選挙では、ウッドローン機関が後援した白人の市議全員が3対1で、民主党指導部の後援で立候補した黒人弁護士を敗るという結果になった。」(Rose, S. C., Spiegel(ed), 1965=1975, 田村明訳: 182-184)。工業地域財団は郊外地区のような理事会をもたなかったということは財団が組織をもたなかったということではない。「財団の創った組織の構造は、決定の段階においてコミュニティが大々的に参加するようになっていく。組織化の初期の時期がすぎると、おのおのメンバーのグループが比例代表制で出席する規約会議が開かれる。規約は承認されるまで、一条一条討論される。同じような会議が毎年開かれて、計画委員会が翌年の組織の仕事を決定する決議案を出す。アリンスキーはこの年次会を、「衆議院」と呼ぶ。「衆議院」は、各グループ一人の代表から成る理事会である。この理事会は、プログラムを履行する責任を持ついろいろな小グループに分かれる。年次会はプログラムや政策のあらゆる事柄の最終的権威である。役員は毎年選ばれ、許される極度の継続する問題の数を、規約によって決定する」(同上, 179-180)。

- 5) 「連邦都市再開発事業は、1949年議会によって法的基礎を与えられた。15年たった今日、数百の都市、数百万の人々、数十億ドルの金がこの複雑な事業にまきこまれている。政府の指導者は事業を礼賛し、マスコミはその大胆な計画と時折みられる成果を熱心に追いつける。そして多くのアメリカ人は、都市再開発は結構なものであって大いにやるべきだと思っているようだ。しかしながら、事業は明らかに議会により設定された目標をはたしていない。つまり10年以上も時がたち、仕事をしてきたはずなのに、都市再開発はいまだに目につくほどの利益をうみだしていないのである。…連邦都市再開発事業は、特に、都市において、住宅の物理的な状態を憂慮する人びとによってはじめられた。…議会は1949年の住宅法の中に連邦都市再開発事業の条文を盛り込んだ。この事業の基本目標は、次の通りであった。1) スラムの荒廃地区を一掃して、標準以下の不良住宅を除却すること、2) 住宅不足を解消するために、住宅生産を促進し、コミュニティの発展をはかること、3) すべてのアメリカ人に恵まれた家庭と良い生活環境を与えるという目標を実現すること。…再開発事業の目標に異議を唱える人はいないだろう。スラムの解消、より良い住宅、改良された近隣住区—これらはすべて大いに結構なことだ。しかしながら、これらの目標を達成する方法については、いささか同意できないところがある。まず第1に、連邦都市再開発事業は基本的に正しいかどうかという点で重大な疑問がある。政府当

局は、荒廃した地区の住民を追い散らし、彼らが現に住んでいる家を取りこわし、当局がよりふさわしいと感ずる美的かつ社会的、経済的に整った地区を再建する、一般の市民の税を使い、土地収用権を行使してよいものか？ …1949年会議においてこれらの問題は実質的によいという方向に肯定され、そして連邦都市再開発事業は実施に移されたのである。…連邦都市再開発事業はまた同じく強く人種問題とかかわりあっている。連邦再開発計画により家を追い出された人びとのほぼ3分の2は黒人、プエルトリコ人、またはその他の少数グループに属している人たちである。…事業が始められた基礎的な前提とそれをつげさせる理論的な動機は、都市再開発がスラムを解消し、荒廃地区の拡大を防ぎ、都心に新しい息吹を与えるということであった。しかし実のところは連邦都市再開発事業が、スラムを取り除く代わりに他所へ移しかえ、そうすることによって、スラムと荒廃地区が広がっていくのを助長しているということになりそうである。」(Anderson, M. 1964=1971, 柴田徳衛・宮本憲一監訳, 1971: 1-8)。

- 6) なお、アジアにおける「アリンスキー戦略」の展開については、ホルヘ・アンソレーナ／伊徒直子『スラムの環境・開発・生活誌－アジア・アメリカにひろがる貧困と民衆の自立』明石書店1992年8月、佐久間美穂「アジアにおけるコミュニティの組織化とアリンスキーの影響－タイ都市スラム住民組織化プロセスの事例を通じて－」(『社会福祉』第49号, 2008年3月)を参照されたい。
- 7) 私はウッドローン滞在中、毎晩、食後、デイビース牧師との会話を楽しんだ。牧師によるシカゴのコミュニティに関する話を中心であったが、世界各国を訪問し、日本にも知己の多かった牧師との時間は充実したものであった。牧師は目が少し不自由であったこともあり、新聞、雑誌などからある個所を私に音読するよう指示し、それについてコメントをするというスタイルも定着した。3Fはそうした中で繰り返し語られた。
- 8) バランはいう。「もしも、ますます成長する独占の経済阻害的な効果が少しも抑制されずに作用していたならば、アメリカ経済は19世紀のはるか以前に停滞期に入っていたであろうし、資本主義が20世紀の後半まで生きのびるということもできなかったかもしれない。それでは、これらの阻害効果を相殺し、アメリカ経済が、19世紀後半の数十年と、おおきな中断があったけれども、20世紀最初の3分の2の期間に、かなり急速な速度で成長を可能ならしめた強力な外部的刺激は一体いかなるものであったろうか。われわれの判断では、それには二つの種類があった。われわれはそれを、(1)画期的な技術革新、(2)戦争とその余波に分ける」(Bran, P. A. & Sweezy, 1966=1967, 小原敬士訳: 266)。バランが挙げる画期的な技術革新とは、蒸気機関、鉄道、および自動車である。「蒸気機関と自動車との両者が、それ自体が吸収した資本よりもはるかに多額の資本の投下に抜け口を開いたことはあきらかであるように思われる。蒸気機関を製造する工業は、けっしてアメリカ経済全体のなかで大きな部分を占めていたわけではないが、しかし、蒸気機関なしには、われわれが産業革命とよぶ経済生活の巨大な転換はおこりえなかったであろう。…自動車産業の場合も、資本の需要に対する直接の効果よりも、間接の効果の方がずっと大きかっ

た。住宅用、営業用の建物やハイウエイの建設をとまなう郊外発展の過程は、つねに自動車によって推進された」(同上：277)。

- 9) コトラーはネーバーフッドの理解でパーク (Park/R. E) とも考えを異にする。かれによればネーバーフッドは、その始まりからずっと政治的な単位であった。「パークは近隣の始まりは単なる地理的なまとまりで、それが感情や伝統をそして独自の歴史をもつようになったのだと言っているけれども、その主張は簡単に覆すことができる。近隣は、今日のシカゴの一部になっているレイク・ビューシティやフィラデルフィアの一部になっているフランクフォード・タウンのように、自治憲章をもつ政治的な単位として始まったものであり、近隣の始まりが単なる地理的なものだという見方は説得力に欠けるものである」(Kotler, *M. Neighborhood Government—The Local Foundations of Political Life*, — The Bobbs-Merrill Company 1969, P. 2)。ネーバーフッドは社会的単位なのか、政治的単位なのか。その検討は、アメリカ史における近隣・コミュニティの位置についての考察を求めるであろう。とりわけ、シカゴ学派の社会学、わけてもパーク (Park, R. E.) 以降における近隣・コミュニティ研究について整理を求めるであろう。
- 10) 「コトラーは市民参加の意味を、近隣地区のコントロールと自主ルールという確信的目標につながるものとして、論理的に発展させている。コトラーは、本質的には、政治体制を基本的に再編成して、市政府から貧しい近隣社会における新しい力をつけるように権力の一部を移動させるべきだと主張している。特に黒人社会について、合法的公共体として近隣地区公社 neighborhood corporations を設立し、貧乏人の再編成された地域社会として、自主的ルールの実質的節度を持つべきだと主張している」(Hans B. C. Spiegel and Stephen D. Mittenhal, [市民参加の諸側面], in Spiegel, H. (ed), 1975: 31)。コトラーのネーバーフッド・ガバメントへの執着は、かれがそれをアメリカの分裂を回避するうえで有効な方法であると認識することによる。ネーバーフッド・ガバメントは決して国家からの分離を志向しない。ローカルな自治を強化することで、白人と黒人を分けている分離主義を克服しようとするものである (Kotler, *M. Neighborhood Government—The Local Foundations of Political Life*, — The Bobbs-Merrill Company 1969, p. 89)。

コトラーの *Neighborhood Government—The Local Foundations of Political Life* — The Bobbs-Merrill Company 1969 が、ポール・グットマン、ハンア・アレント、ケネス・ボウルディングらの高い評価を得たことは知られている。しかし、コトラーの認識をめぐる可能性については異論もある。それは、Speigel (ed), *Citizen Participation in Urban Development*, NTL Learning Resources Corporation, 1968=田村明訳『市民参加と都市開発』鹿島出版会、1975に収められた「近隣住区でどれだけコントロールするか」における、ウィリアム・プロクシマイヤー上院議員、フレデリック・ガットマイム (ワシントン市の都市問題コンサルタント)、ジェームス・ヘイルブラン (コロンビア大学経済学教授)、ミルトン・コトラー (ワシントン市政策研究機関常任研究員) との討論にも窺うことができるであろう。

- 11) ここでは、次の指摘を記憶することにしよう。「シカゴ大学はシカゴにあるその他すべての社会改良をめざす組織と同様、同市のリチャード・J・デイリー市長一派の思うままに操られている。…シカゴ市の人口350万人の四分の一以上を占める黒人は白人と隔離されて、繁華街の南と西にある二つの巨大な、長方形の黒人街に詰め込まれている。市長のこうした方針は、黒人と一緒に住もうとしないアイルランド系、ポーランド系、ユダヤ系などの市民の偏見を反映するもので、市長の周囲にいる実業家たちもこれとそっくりの態度をとっている。シカゴには黒人を封じ込めるための世界最大の公営住宅団地がある。これはサウス・サイドにそそり立つ高層アパートのことで、住民に対する警察の監視の目が行き届くようにと、まるで捕虜収容所のように作られている。この団地を管理するシカゴ住宅局の局長はチャールズ・スワイベルだが、彼はスラム街に貸家を所有するマークス社の社長でもあるのだ。住宅でも学校でもシカゴでは人種差別が行われている。…黒人はかつては、シカゴ周辺の企業に必要な安い労働力の源泉であった。だがそれらの工場でも不熟練労働者にできる作業の大半はいまでは自動化されてしまい、しかも多くの工場が郊外に移った。市内の高速度輸送機関はこの新しい工場地帯には通じていないし、また黒人は自動車を買えないので、次第に職を奪われていく。シカゴの黒人地区はこの20年の間に、先の日当てもなく絶望的になった人で溢れるようになった。…デイリー市政の政策は、シカゴ大のそれとまったく同一である。シカゴ大は独立の公共機関とされてはいるが、実際はサウス・サイドにおける市の小間使いにすぎないのだ」(Ridgeway, James, 1968=1970, 杉辺利英・河合伸共訳: 235)
- 12) そのことを当時の学生も察知した。既成の利益集団に対する異議申し立ては若者の反乱となって現れた。「白状すれば、リッジウェイが『崩壊する大学』(朝日新聞社刊)に描写したことであるが、シカゴ大学がハイパーク地区や周辺の黒人街の住宅を購入し、大学の限りない拡大を計る政策を打ち出したときに、当の地区の生活圏を破壊するとして抵抗したサウル・アリンスキーの活動に、まだ若かった著者も他の学生とともに参加した覚えがある。1955年から56年のことであつたと思う。リッジウェイの描写はあまりに大学を悪者に仕立てあげすぎているようであるが事実、周辺貧民街からの犯罪者によって大学本部内で白昼に殺人が行われているような状況でもあり、その意味で大学側の自衛的な知識人コミュニティ再建活動でもあつたらしいが、とにかく貧民街を敵視しているようなその急激な進出作戦には、大学院の学生のだれもが怒りを覚えたものである」(井門富士夫, 1970: 70-71)。
- 13) 考えてみれば、近隣との距離を広げ、貧困層の問題に対する関心を変化させたのは教会だけでない。それは、アメリカン・サイエンスと呼ばれた社会学にも読み取れるところであつた。創設期の社会学者と後の社会学者はその性格を異にする。ルイス・コーサー(Coser, L.)によれば、それは、社会学者の、社会改良家からアカデミック・コミュニティの構成員へ所属替えであり、社会闘争から適応の問題に関心を移す社会学者の姿であつた。社会学者は社会動学よりも社会静学に関心を寄せるようになり、自らの支持層を闘争志向の団

体から闘争を極小化することに重きをおく集団に移しているとコーサーは主張する。「創設期の社会学者たちは、自らを社会改良家であるとみなし、彼らの読者層にたいして改良家としてはたらきかけた。そのような社会学者の自己像と世間一般の風潮とが、闘争状況にたいして注意を促した。…闘争は単にネガティブな事象としとらえられるだけではなく、きわめてポジティブな機能を果たすものとみなされた。…次の世代の社会学者たち、とりわけシカゴ学派の後継者たちは、やや異なった状況に直面した。…パークの著作は、それがアカデミックなコミュニティの枠を越えて外部に浸透したかぎりにおいて、人種関係のみならず、都市改良や都市改善の団体にとっても重大な関心の的となったけれども、急進的な人びとや改良をめざす人びとにはほとんど影響を与えなかったようである。…現代社会学を支配する社会学者の大多数は、みずからを改良家とみなしたり改良家の支持層に訴えかけたりするどころか、公的および私的な官僚制度における意思決定者の間で発言の機会を得ようとするかのいずれかである。彼らは、闘争よりもむしろ適応の問題に、社会動学よりも社会静学に、もっぱら関心を集中させる。…初期のアメリカ社会学たちが闘争を志向する集団—弁護士・改良家・急進論者・政治家—を自らの支持者とみなして語りかけたのにたいし、後期の社会学者たちは、もっぱら、共有価値を強化し、集団闘争を極小化することに関係している集団や職業団体、すなわち、ソーシャル・ワーカー、精神衛生の専門家・宗教的リーダー・教育者・ならびに公的・私的な管理者などのなかに、自分たちの支持者を見出した。後期における改良運動の相対的な弱さ、および、行政の仕事のなかに社会科学のサービスを要求する官僚構造の台頭によって、支持者層のこのような変化が促進された。この変化にともない、社会学者の多くの自己イメージは、改良への自覚的主張というそれから、人間関係の「調停者」および人間関係の専門家という自己イメージへと移りかわった」(Coser, L. 1956=新訳, 1973: 3-23)。

参 考 文 献

- Alinsky, S. D., *Reveille for Radicals*, Univ. of Chicago Press, 1946 (＝長沼秀世訳『市民運動の組織論』未来社, 1971)
- Anderson, M. *The Federal Bulldozer—A Critical Analysis of Urban Renewal, 1949-1962—*, The M. I. T. Press, 1964 (＝柴田徳衛・宮本憲一監訳『都市再開発政策』鹿島出版会, 1971)
- Beard, C., *An Economic Interpretation of the Constitution of the United States*, Macmillan, 1913 (＝池本幸三訳『合衆国憲法の経済的解釈』研究社, 1974)
- Bran, P. & Sweezy, P. M., *Monopoly Capital*, 1966=1967, 小原敬土訳『独占資本』岩波書店
- Edsall, T. B., *Chain Reaction—The Impact of Race, Rights, and Taxes on American Politics—*, Norton & Company, Inc. 1991 (＝飛田茂雄訳『争うアメリカ人種・権利・税金—』みすず書房, 1995)
- Coser L., *The Functions of Social Conflict*, Routledge & Kegan Paul, 1956 (＝新睦人訳『社会闘争の機能』, 新曜社, 1978)

- Esquire Associates(ed), *Fifty Who Made The Difference—An Anthology of the December 1983 issue of Esquire Magazine, 1983* (=ロン・ローゼンバウム・小沢瑞穂訳「レヴィットが建てた家」, エスクアエア・常盤新平監修『アメリカの歴史を変えた50人』新潮社, 1988)
- Fish, J. H., *Black Power/White Control—The Struggle of The Woodlawn Organization in Chicago—*, 1973, Princeton Univ. Press
- Gans, H. *The Urban Villagers-Group and Calss in The Life of Italian-Americans*, Free Press, 1962
- Hacker, A. *The End of The American Era*, Atheneum, 1970 (=アンドリユー・ハッカー北野利信訳『アメリカ時代の終わり』評論社, 1973: 119-120)
- M. Hauser, P., Conflict vs. Consensus, Chicago Sunday, SUN-TIMES, December 13, 1964
- Kotler, M. *Neighborhood Government—The Local Foundations of Political Life—*, The Bobbs-Merrill Company, 1969
- Kotler, 「近隣地区でどれだけコントロールするか」(in, Spiegel(ed), 1967=田村訳, 1975)
- Henri Lefebvre, *La Revolution Urbaina*, 1970, Gallimard (=今井成美訳『都市革命』晶文社, 1974)
- Ridgeway, James, *Th Closed Corporation—American Universities in Crisis*, Random House 1968 (=杉辺利英・河合伸共訳『崩壊する大学—アメリカの産学協同—』朝日新聞社, 1970)
- Rieseman, D. *Abundannce for What?* Doubleday & Company, Inc., 1964, 148 (=加藤秀俊訳『何のための豊かさか』みすず書房, 1968)
- Rockefeller3rd, J. D. *American Revolution*, (=多田稔訳『第2次アメリカ革命—高度産業社会から人間主義社会へ—』集英社, 1974)
- Rose, S. P. Saul Alinsky and His Critics, Cristianity and Crisis, July 20, 1964 (in Spiegel(ed), *Citizen Participation in Urban Development.*, NTL Learning Resouraces Corporation, 1968=1975, 田村明訳『市民参加と都市開発』鹿島出版会)
- Silberman, C. E., *Crisis in Black and White*, Random House, 1964
- R. Senett, *The Use of Disorder: Identity and City Life*, Alfred A. Knopf, Inc., 1970 (=今田高俊訳『無秩序の活用』中央公論社, 1975)
- Hans B. C. Spiegel and Stephen D. Mittenhal, 「市民参加の諸側面」(in, Spiegel(ed), *Citizen Participation in Urban Development.*, NTL Learning Resouraces Corporation, 1968=田村明訳『市民参加と都市開発』鹿島出版会, 1975)
- Thomas D. Sherard and Richard C. Murray, 「教会とコミュニティ組織」(in, Spiegel, H. B. C. (ed), 1965=田村明訳, 1975)
- Wolf, A. *America's Impasse, —The Rise and Fall of the Politics of Growth—*Random House, 1981 (=杉本正哉訳『現代アメリカ政治の軌跡』, 日本経済新聞社, 1982)
- Willam F. Whyte, *The Organization Man*, Simon and Schster, 1956 (=阿部・藤永・辻村・佐田訳『組織のなかの人間』1959)
- Wilson, J. 「計画と政治—都市更新への市民参加—」(in, Spiegel, (ed), *Citizen Participation in*

- Urban Development*, NTL Learning Resources Corporation, 1963=田村明訳『市民参加と都市開発』鹿島出版会, 1975)
- 井門富二夫『市民の大学』東京大学出版会 1970
- 佐久間美穂『アジアにおけるコミュニティの組織化とアリンスキーの影響—タイ都市スラム住民組織化プロセスの事例を通じて—』、『社会福祉』(日本女子大学社会福祉学会, 第49号, 2008年)
- 佐々木昌二『アメリカの住宅・都市政策』財団法人経済調査会 1988
- 富田静子『デイヴィス宣教師のこと』(Japan Baptist, 1992.4)
- 内藤辰美『地域再生の思想と方法』恒星社厚生閣, 2001年
- 西尾勝『権力と参加』東京大学出版会, 1975
- ホルヘ・アンソレーナ／伊従直子『スラムの環境・開発・生活誌—アジア・アメリカにひろがる貧困と民衆の自立』明石書店, 1992年
- 松村岐夫『都市行政における近隣 (Neighborhood)—アメリカにおける住民参加の理論と実際—』都市問題, 1972年10月, 東京市政調査会, 24頁)。

追記 この拙い論文を故富田富士雄・静子の両先生とデイヴィス E. 牧師に捧げたい。